

添註并丸月

鶴舎百節翁註釋
七部之猿蓑



猿蓑

晋其角序

俳諧の集つくる事古今よりありてけ道のわけて起る
 べき時あまや幻術の才一としてその句を魂の入さきいゆめ
 ぶ申めえらる似たるくく之く世よとまうもく人よ
 うつりてふ変の姿をきくはむと法はつら及た心を
 たらはるきやうみあうらの西行上人の昔も人を作り
 たる声きこむは笛を吹やうよあんな侍々と申せむしんふ
 人よ成る侍ももよのまのあうきさるり五魂の法の
 おろそのまはるやたさいたまふ人の入たるアイウエ
 才をくひききてこのあんなかきもあぬをく只
 俳諧は魂の入たる舞まをて我翁行脚のころ

伊賀越一山の中にて猿よ小叢を忘きて俳諧の
神を入るまじくもハ多ちまぢ断腸の如し叫ひん
あたし惟多き幼術あり、こもをえとて以て
つくりたる猿この名をささるる、是る序もその心を
とて塊を今をそと去る凡兆のね、まあまあをてま

○

猿叢ハ翁精撰ナリ花実全ウシテ序モ自筆ナリト△祖翁一
代、髓脳蕉門ノ亀鑑ナリト△芭蕉葉船ニ曰サるその序晋
子の名を和して実を名の稿ありとあり
○晋其角左立龍米元草ノ如持、硯傳来ニ宝晋齋トアリ、
硯ヲ得テ蹄トスノ左立龍ハ其角ノ師ナリ。又易ニ火地晋ノ上九
晋其角維用伐邑所吉之ヲトレリト

田 製

○古今にわたして韓文、曰く不通古今馬牛而如襟裾

○おもて起るき、長浦子、舉白集、詞ナリ長情ハ木下若

校守ノナリ

○幻 だつちゆくまの、まあつてまはるのあり、のそそをまへく

○ままゆめん系、蒸煙如者の教、旅のよままた旅を、そそ

まらり愛の中あふゆめをそそあふ

○不変の妻 流行ニ居テモ正凡ヲ忘し又トクトへ、老木ノ根ヲ十

人カ十色ニヨムヤウナリ

○五徳 ハ仁義禮智信 又俳諧五徳ハ一俗談ヲ用テ二自讃ニ

侍リテモオカシキト三トリアハス興ヲ催スト四ニ初心ノ学ニ学クニテ和歌ノ浦

波ニ心ヨセ侍ルト五ニ集教古事未歴分明ナラヌトモ一夕ニオハ興ヲナシ侍

ラハ何トモ廣ク引ヨセテ附侍ルト是五ツノ徳ナリト徳元ノ初学抄ニアリ

二

○心をこゝに 心の師トナレ心ヲ師トスル丁ナカレ

○西行上人 秋氏要説：有過能自改曰上人。事文類聚：行菩薩心曰上人

○骨多て人を化り 撰集抄：○西行上人同居ノヒコリニ別

于花月ノ友ニセント廣キ野ニ出テ骨ヲアミツラ子ヲ作りテ侍リニ

カ人ノ安ニ似侍レトモ色モアシク又ヘテ心モ侍ラサリキ声ハアレ

トモ弦爰ノ声ノ如シ実モ人ハ心カアリテコソ声ハトニモカクニモ

ツカハルレ只ソノ出ヘキ謠計ヲミタレハ吹損シタル笛ノコトクニ

侍リサテモ此事ヲフシニ覺ヘテ花洛ニ出テ侍リニ此ヲレヘサ

セ方ハセシ徳大寺へ参リ此事ヲ問ヒ奉リシニ及魂ノ術ヲ日浅

ク侍ルニテ香ヲハ焼又ニト

○おろろの 日本書記：於呂曾加之輕易ノ是哉

○こそ 万葉考：こそハ物の中よりあけてよ辞。又
コヒ頭フフニ用ルコソあり

○断腸 カリ人ニ子ヲウタセジトテ叫フ親ナル腸ヲ断トシ

○幻術の第一として 續、あた子懼えき 幻術尾、コレ即チ言

霊ノ一ニテ柳木人磨ノ言霊ノタスル國山上憶良ノ言霊

ノサキもあ 國トヨメル 万葉ノ歌ノ如ク其々ニ入りタル霊ノ不

測ノ感動ヲナスヲハコ、ニハ幻術トハカキナスタルニ實ハ言

霊ナリトシルヘシ

初〜くま猿も小篋をゆ〜
芭蕉

句意ハ我ハミノヲ著テ居ルソコテアルモハミノヲホシケントアハシ
ミノ心ナシ鳥獸、及フカ塊ナリ全情ナリ。定家卿、歌ハ「藤花
めて雀もさるおの重ひにいえぬ」の句もさる。此歌雲の上人雅口士
額烏帽子トイフモノヲ着テ小弓ヲ射ルアリニカルサ所家、男童コ
シラニホヒテ小弓張ヲ見テヨミ玉フ之箭ハコシテ取りテ猿カ人真似
ト云フアレハホミノヲホシケント轉セウシナリ

あまのつげ〜
其角

此二句ハ歌集、父母ナリト。アレ聞ケト心トメタルハ姑獲城外
ヤ三井寺、鐘トハキユユ。ソコ又ケ、句ニ元トハアレ聞ケヤ也
聞ケト、云ミテ底又ケ。君子不器、器ハ形一定シテ変

スルナシメトヘハ筆ハ硯トナルヘカラス句モ又一体ニカケヨ
ルヘカラスカメヨシハ器トナリテセバシト云心ナルヘシソコテ底又
ケトモ云リタルナルヘシ

時雨もや美ひの〜
子那

素友曰、いさゝのともく〜ト云イサ、ハイサ、ヲクフ、尾ヲフク
ミテ其ナリトナル、小魚ナリ目、細キ網ニテトルイサ、湖水ニテ
ル魚一名知々支但し湖水ノ外ニナシ

哉人〜
文州

全葉集、い〜のい〜山おろし志の〜
此歌ヲ鑄形ニシテカケ又クト詞一ツニテ俳諧トヤ、余、橋、ウコカ又
能トスヘシ。能ト笛ナリ。おまぬ〜んトイフ詞ハフケリ

鏡持の〜
正秀

猶ノ字イキト心ニ見レハワルイ時雨又レ片ナホト見ルヘシフリ
タツルノフルハミクシノヒキニ句ニ意ハカニ時雨ノ中モオホ君ノツトメ
ナレハ錢持ツヤリヲフリテ直ニナリト大名ノ行列ナルヘシ

廣 沼 や い づ め る 沼 太郎 史 邦

廣 汰 や ヒトリト云ミ沼 太郎 ノトリ合セオモシロモイカニモ言外ナ
ヒシキ必アリオヒシトイハヌカ子カラニ。詩經名物并解江户
ヒシクヒ一名又ニ夕ラウト呼モノアリ泥亀トモ云ヒ又鳴ナリ但
眼上 澄白 條アルヲ異トス

舟 人 は め の 道 して ま 尚 白

乘子ハ瀬田ナリ瀬田、廻ラントスルヲ舟人ハ降ラヌト云テ舟
ニ乗セシコノガ、め道ニテ又カレタト云ハ一、石ノ淨ルリ亦ニモ浮陀六
カ又カレタト云ハ一、アリ

伊賀の境に入て

あつかやを良の隣の一時雨 曾良

栞屋曰伊賀ハ羽ノ生烟ナレハナツカシキモムカシ、京並河ヲトルカ

時雨や 思ふつむの意 明り 允兆

夜ニクシノ風情ナリ意、ホカケニ妻女ナト見ヘテ引クル、ケシキ
見ヤクムン句ナリ物諦ナリトイフヲ余情ニシタナリ

馬 かくて 木田の 行 七 州

古歌ノ伴ヲトリテヨミタルナルヘシ意セヌカハ楽トヤトナリノ古歌、
山 坂ノ木橋の

たまはさし 星の 光り や 小 羽 紅

古歌 神を月や 星の光り 羽紅
ルユエフルニイトオモフムラ又フツテ来ヌトシ

新田 子 稗 穀 燈 子 一 一 昌 房

田ノ面ニ何モナリ見後シタムニトヘカラノケフルケシキクシヨ
キトリ合をニ向フノ山ノ夕ノスニ井ニテ目ニ見ユルヤウナリ

ソモカシヤ沖の時のまの帆片帆 去来

此夕書損シテ後ニソモカシヤ片帆をけりし其牛ニ直帆モイ
ハスシテアルナリ

そつ ちおろりや北斗の星の前 百歳

初霜ハイウトシタモノニ行ヤ我ニスオニシテ眼前アリ。月落
鳥啼霜满天。北斗ハ人君ノ象。北斗星前横旅一人南樓月下掛
寒衣の句意ハ北斗ノ君ニ夕トテテコノ寒オニモットメテ行クト也論語ノ北
辰其処ニ陸ヲ衆星之ニムカフカ如シトナリ。此夕附合集ニ上五ノ霜ノ今
リヤトテ眼ノ音氷系あづきの道ニ暮ニいゝあひまのまゝの松ノ下

一 ころり ちおろり ちおろり 野水

句意カクシタル所ニ一竹助ニオト出シタル上段ノ作ナルレシオフ
ケナクモ評ヲナサハ上ノ句ヲ三段ニ上ナレシ。霜相夜ノ雲ニオシ降
ラントスルケシキノ五雜俎ニ百艸不畏雪而裹霜

淀

もつ ちおろり 舟の中 其角

オモヒヤリタルヤニ淀ノ夜舟ノ居処セニキニ。うつはざぶの狂言ノ歌
リ子ノ舟の中より何と云ふも竹をまゐるのちまゝなり

帰 花まるも 去り 人 庭 切き 左

春ノ花ヲメツルハ勿論ニテ帰リ花モニメテト云心ナリサテ人ハ花ノ下
ニハ體ヲトヲシキナトエシ長大方ハ俗物ニ我ハ庭切レシイテ見テモ高

上ノ見識カアルトナリ

禪寺如松の蔭を^{カミナ}や 沖を月 允兆

上無ハ陰、且取上ナレハイツクモサトシキニワキテ禪寺ナレハ松蔭
葉ノミシヤトナリ。神無月無字俗稱ニ万葉ニ十月ト書テカミナ
ツキノ謂之陽月所以見陽氣已萌也

百舌鳥の蔭系地牛の尻を 十月 嵐蘭

サトシキ野中ニ人影モ見ヘス夕ニ百舌鳥カ抗ニクツツテ尾
ル斗ニヤ是カラ海ハイヨクサトシカロウ。 **東本集** 鴨ノ尻系ふる枝の
サ秋も去りかきてあしたの系糸ををりい

小かぶしくや頬腫痛むくの 顔 芭蕉

風ノ風ノスサトシキ殺気人ノ息ヲシテハレイタニシム此人ノ字自ト他ニカハル
砂ニケハ耕后アメリノ溪辺ニラスルニ雀ノ家ノ傍ニヨリ冬木ニアルケ

とキナリ

奈良ヲテ

掉床の加々多利那の 枯壁に 芳

三笠山ノアメリ春日ノ境内春日野ノ凡情ナリ

法柳をまのめて 道系 十夜か 据道

十夜ノ時節の夕ナリ木ノ葉ミナ落テ梢ニ法柳残リタルヲ十夜系リ
ノ道スカウ詠メタルオモシロシク佛曰咲夕手本ニナルヘシ十夜ノ縁ヲハ
ナレニ面白シク十月十五日ヲ俗ニ念仏丸メト云ワラフヘシ

ちやの花やゆりく人多美 冥聖女 越人

梅揺ハ常人ニサメタル葉ノ花ハ文雅ノ人ニシテトノ意ニテ此女ノ
気性ノ高キヲオメタルナリ。種茶必下実後植則不復生故解
婦必以茶為禮固有所取の志形のよてハ嫁ノミヤケニ茶ト書ナリ

十夜伊勢寺
夏用トイフモ
天變サコウ
リシラ感シ真
行フ

長おのり、
鹿居の者上
4たあつる身

送ルトナリ茶の實下して生ス再ニ植替レハ枯ナリトヨ大姫女
ハ鹿居キ娘ハ鹿居士ハ禪家修通ノ人ナリ一説醜ナリト茶ハ
禪家ノ縁ナリ天取王女ハ父ハ随テ禪居リ嫁セスト不嫁ハ花ニ
嫁スルハ實也

みねの茶の花中へ子折しおしるる

猿雖

ミノ虫必枝ヲ便リテトメルニ茶ノ花用ニ折ラシケル哉ト嘆シ
タルニケルケリ、深き息ヲサトルヘシハ後鳥羽ノ院ノ頃トヤヤ
西ノ京ニ皇女トヨキ梅アリ大内ヲコトイフセヨトアシハ世ノ歌ニ
勅あまのいそをかしこし鳥羽の宿りといひうそへん此歌よて昔こ
やみヨウと此歌ニヨルハアラ子ト梅ハ鳥羽ヲメメニメテタクミ
ノ虫ハ又ハ引カヘテ表ナリト

古寺の望見の子も青し父かまよ

九兆

五製

カハルアレタル古寺モ伝寺ノアリテ父ノ用意スルソ山ノ奥
オヘウキ世ノ中ト觀ニタルナリハ望見ノ子ハ父ノヨシ望見ノヤウナ
モノナリハ冬ニカテ耳ハ家ノカニ耳ナリ

翁の望見子閑居をゆめて

雑炊のあとこころあふハ父こころも

其角

雑炊の名也トイフモノハナケレトモ佐モウケタル言ハナリト
ハ雑炊ヲクフテ佐ノ冬ニコモウヤウハ定メテチカシカウニ流石ノ
翁ノ閑居ナレソフテアウトイフ意ヲフクメリ堅田ハ八景ノ一
ツナレハ浴雁モナルナカラ雑炊ノ名所ヤウハチカシカウトナリ
ハの寒さ牡丹の花のまづ

得車来

冬牡丹ノ群ヲヤメルケニキ押出ニタル作この冬牡丹ノ詩ハ顔色却
因凡由路深英華不畏雪霜欺

八

草津

晦日も過りくうをのみの子哉 尚白

草津ノ名物のハカ條ヲヨミタルレノ意ハ十月亥ノ日コソ條
ハ時メクモノヲ欺ウバカ條ノ解昌ハ十月ノ廿日過テモイウニテ
モ井ノコ條ノヤウニハヤル一トシヤトシ

神迹 水口たうの馬の鈴 玲瓏

此夕土山ニテノ吟ナルレノ一説水口狼原寺ノ僧霜月朔日神
迹ニ逢坂ノ崗ニテ山ノトモフアリハハ疑ノカニテ受詞ヲハフキタルナリ

霜月朔日

膳まつ外又ものあし 赤 柏 良品

霜月ハ魚肉モナク霜相カシラ地菜モナクヨクラ膳ノ上ニ赤柏
ト趣向シタルナリ。赤柏霜月朔日北野ノ神へ供御スル也

用ルヨシ又ハ豆飯ヲ用ルル也アリ赤柏ト云。又カシハ葉ヲ云フミカラ
ハ赤飯ヲカシハ葉ニモルヲ赤柏ト云カ北野ノ注非ナリトモ
。玉拍、赤拍、青拍用ルト赤柏ハ七拍ノ一種アカウ柏トモ云
アカウ柏トハ秋ナリ漆ノ本ノ紅葉ヲ云。アカウ柏ハ赤吟老人
カ本邦冬至ニアリス人トモ上月朔日赤吟堂ノ飯ヲ用ユコシ
ヤアカウ柏ト云

あまの月の水を種うや水仙花 不玉

羽州坂田

水仙ノ雪ヲ欺リケシキハ水無月ノ水ヲ種ニヤトオサナク云フオハフ
セシナリ。土用中水仙ノ根ヲ洗ヒ植ルトキハ花早シト又土用
中ハニテ植ルヲヨシトス

今ハ世をたのむくきや冬の 降 尾長 旦暮

夕トハハ仕年ノ頃ハ使者トナリテ横行セシモ年老テ佛ノ道
ナトニ入タルカ如シ衣シテヤシ

尾頭のこゝろもとろき、海菜が 去来

夕トハハ過去モ未集モ心モトナリウウウノトスクス我
人ノ心上ヲフクメリノ蚯蚓ハトセニイカニトイフ難アリ答

海ノ菜ト書ク故ツ胤ハ眼字ニ

一抱〜 冥き海や 釣干菜 探丸

干菜ハ多情ノモノソフ有情ノコトクイヒナシト作者ノ
勇折ナリ

みちもたこ夏加夏の鳥井のささ、弘 尚白

アレハテタル野ツラノ見ツタシニ石ノ鳥井ノイウノト
ニタルカイト、神〜ヒタオソシニカシユムケシキヲ冥ノカ

哉トノミイヒテ余情ヲフクニセタルニ但ニ題詠ノ九ニアラス即

自体ナルヘシノ多賀明神淡州多賀也 現余ル所伊持諾尊
又日ガ宮トモエウの中仙道ノ通り大ナル石ノ鳥井アリ

茶の湯もてつめたき、日もも地着古哉 亀翁

茶ノ湯ハモト酒ニ失アルトヲニクミテ陸羽カ柄ニカヘテ他ヲ兼ホ
シムトシハシメタリソシテ後世コト〜シク茶道トテ秘古スルヲ
ナシリタルナリ

山灰 竈よるゝ夏ノ猪の倒も晴り 凡兆

山灰カニニキ夏ノシハノタツネ果野倒シタル今ハノ際ノセツナ
カ衣シ海シオソロニキ猪モ他リヤウニテヤオシクモ衣シニモナルハ
言霊ノフシキナリ

住つぬ旅のすゝろや置道火壇 芭蕉

例ノ慈鎮和尚の墓のそと又ゆめを自して弟也トイフと思
ラツンテオテ俳諧ノオカシミヤウへしナリ又木自末ニ「うかしめ
のうかしめあり」様やかたすうつまかたきものさあふらふ
序あり、海や火燧を清ふのさめぬ内 其角
上五全情アリ老又し物ウヤシクテ火燧フトニノオメ又内ノ
心ノヨキトニ

門前のの家とあぢふ 冬ニ至 北 凡北

冬至コウ一線ソソフトテケフヨウ日掃モノヒテユルヤカニナ
ルハシメノ祝日ナシハサシモセハシキ小家ニテモアソフトニ門前
トハ寺前ニモセヨ小家トハハ料ナリノ冬至日身ヲ安し
體ヲ静ニヌ奴婢モ帰るんナカレト至テ大切ナル日ナシ
ハ唐土ニテハ元日ヨウなまう祝フトナリノ共工氏ノ子冬至ニ

飛ス其是疫鬼トナシリ毒ハ夏ヲ恐ル故ニ冬ニ至ノ日カを粥ヲ喰
フト荆林足歳時記ナリ

木鬼やおもしろ切なふ空の白 萩境

一言主ノ神ナトノタトヘハアウ子トヌモノ顔ノサニムクツケクテ
老スヘキモノニアラハ登ノ人月ヲ眺ヘキニ思ヒキツメル登ノ息
哉トツクリまんナリ

みづつくに 眠るるをさくまら 羊残

此鳥ハワキテ月ノスルトキモノナシハ鳥ヲヒモヨク見スニシテ
ネフル所ヲサシまんナリ

貧民交

まじいハリ多減子の切を譲る 文州

人ノ物ヲユウルモユワラルモ心ト心ニコソアレ貧者ニ万令ヲ送ル

ルモ心ヨカラスシテユウシハ受ケス紙子ノ切シテモ万金ノカヘ
テウレシト思フフモアルヘシ支コリ本ノ分見交ナルヘシ

浦風ヤ巴を渡 比むら 千鳥 曾良

浦風ヤムラ千鳥アメリニヘンフナシ中セノ巴ヲクツスハヨク働キ
タル詞ナルヘシ

あゝ 碇やとーり 馴れな 友千鳥 吉来

性道ヨリテカニコシカニ荒塚ヲ去リ馴タル千鳥ナシハコ
ソ行何ノ鳥ナラバイカテ馬行ヘキトイフヲクメリ

狼の 踏跡 夕や 暮 千鳥 支那

オソロシキ狼ノ声ヲトキキシ折モアリシヲ庭ナメクニ表シ
ナル千鳥ノ声ヲキクフヨサテモカ日ノウウリ行早キ如ク嘆
シタルナリ中セニ自ラ付クヘシ

背戸口の 入江の ぬふ 千鳥 武州

浪ノ上ニ住ミナシタル千鳥モ寒ニ夕ヘカネテヤ谷戸口ノトヨ
ミ下シテ見ルヘシアハシワカシ

いづまてこの 雲の まつり 鳴 千鳥 千那

世ノ夕ノムウカシヲ思ヒ合セテ見ルヘシ頭ニ雪ヲイタキ
ナカフ道ニモノヲ買ヒカツキテアリクワシクノ姿ナルヘシ。千
鳥ノ下ニテラントイフ詞アルベケリ

矢野の 池や 浦の あくも 千鳥 元兆

越前敦賀ノ浦ヲキミナクレニ、四字感深し寒カニメエカネ
タル千鳥ナルヘシ

竹伐 土の 見は ちよあや 鴉の 中 本節

人情ヲ尽スリ筏土ノ漕来タルアトラ見カヘシハヲし鳥ノツトヒ

ヲヤフリ来んナリカテモ心ナキフサニタルト

水底を具そまねた魚の鴨うふ 文州

水中より出たる小鴨ノケシキイカモイハニカタナシ

鳥をよぶ人とおぼし余吾の海 路通

余吾ノ海近に伊香郡湖水ノマキニテ一里ハカリサニ入タル山ノ

フトコロ、ヤウナル所ナリ

死すて操ぬらん 襦鳥のりぬ 且葉

五ツヨキ作

襟巻をみず引入して冬の月 杉風

何ノ子細モナキヤウナシ氏春ノ月秋ノ月ト思ヒ合スレバ時

候ノウツリ行スカタアハレフカシ

木の本戸や浪のささきて久々の月 具角

五葉

軍書ノ休ナリ平家ナトヨミテ見レバアハレフカシ

かゝるありの浦周をうりや冬の旅 長崎 暮年

旅ハウキモノゾ内ニ居ルナラハイクラウ着カサネテモ寒イニ

見ヤふさ一旅人さふし 石部山 智月

石部山トイフ五文字ヨク叶ヘリ歩行旅ノアリオハニハコ方ナク

アハレニ上五文字又ヨシ

翁の行跡ノあふさ衣をあらへて詠あり畧之

行脚ハ禪語ナリ行ハ旅行ノ義脚ハ虚字ナリ唐宗ノ俗語禪

家專ラ用ヒタリ

首出——初雪見もやけ衣 美濃 竹戸

此念ヲ着ラ風雅ノ悟ヲヒラカントこのもやハ見タラハイカニオモ

シロカウント云フ意ヲフクメリ

五

題竹戸之衾 竹戸カ翁よりモロフ女衾

冬 冬 氷 氷 我々 我々 の の 衾 衾 曾良

オハハハ翁よりヨイモノヲモウイコシメ翁ハ常ニ用ヒタノテ私ハ

常ニ公羽ニ給仕シテ置キテシメ随分大事ニカケテ侍ナレトシ

魚の如き 鶴のやまききり 氷水 探丸

人ノ事ニオシアテ、見シハ表シテカシ宝ノ山ニ登リテ宝ヲ

得ルカ如シ

志川 志川 加さ 加さ 珠 珠 数 数 何 何 たり たり 煙代 煙代 也 也 文州

ヨイ年ヲシテア、シテ煙代守ルモノハオウニ後世ノ心モナク

サテ、アサニシイトナリ

御白砂ニ候す 何カ事アル井ノ傍ナリ

孫 孫 つか つか 加 加 しま しま 居 居 系 系 雪 雪 ぬ ぬ ぶ ぶ 史 史 邦

コノアラシノフルニ上ノ御用ナレハウコクユトハナラヌサテ、
カミコキフシヤトナリ。膝着ハ小羊五毛ノ孫ツキタルモノナリ又軾
ハ八角ノ筵ニ縁ヲトリタルモノナリ

授 摺 授摺 の の 糸 糸 の の 霞 霞 ね ね ふ ふ あ あ ぶ ぶ し し 水 水 野童

冬 冬 オレ オレ ノ ノ ケ ケ シ シ キ キ オ オ モ モ シ シ ロ ロ シ シ 狂 狂 字 字 眼 眼 字 字 ナ ナ ル ル ハ ハ シ シ ウ ウ ナ ナ ア ア タ タ ル ル ホ ホ ト ト ア ア ラ ラ シ シ フ フ ル ル 中 中 ア ア ラ ラ シ シ フ フ ク ク ケ ケ シ シ キ キ ナ ナ リ

鶴 鶴 の の 橋 橋 ぎ ぎ り り ニ ニ 浮 浮 いた いた め め ぶ ぶ き き 水 水 永 永 蜂

鶴ノ橋 鶴ノ橋 ぎ ぎ り り コ コ オ オ セ セ シ シ ア ア ラ ラ シ シ カ カ モ モ ト ト シ シ カ カ モ モ ナ ナ リ リ ハ ハ カ カ ヤ ヤ ウ ウ ニ ニ ウ ウ メ メ タ タ ク ク ウ ウ ヲ オ ク ク シ シ ク ク ア ア ル ル ニ ニ イ イ ト ト シ

呼 呼 区 区 一 一 新 新 愛 愛 尼 尼 毛 毛 ぬ ぬ あ あ り り 水 水 凡 凡 兆

フ フ ナ ナ ウ ウ リ リ ナ ナ ラ ラ テ テ モ モ ア ア ル ル ハ ハ ケ ケ シ シ 氏 氏 フ フ ナ ナ ウ ウ リ リ ニ ニ テ テ 何 何 ト ト ナ ナ リ リ オ オ モ モ シ シ ロ ロ シ シ 曾 曾 折 折 又 又 ル ル ナ ナ ル ル ハ ハ シ

さきぬほろもみや 初冬のあまあまをて 晝好
冬ノ日カハリヤミキナ言コトテ朝暎のあまあまをてをぬくつて其の
能く日初あつたれとぬくおとらし。○句佛日朝餉共不朝暎と書つれを
朝けとよんで可也とあり

初雪や内子居さくぬ人 誰 其角
此初雪まぬらん誰を呼ばさうらう 誰か内子居多たらうと云
こちまぬらんはあり

初雪も雁鳥部屋祝く朝日も 史邦
人情をそをり 此雪うあふのてぬらんを思つた雁鳥のこころしたと
とく歌にゆくとて雁鳥部屋をぬくぬく

霜やけのよを吹きやる雪まらけ 羽紅
子をあひふゆあふくをぬくつまぬく句意に雪をまらけたふゆの雪やけのよ
をぬくらんをぬく

こはもりのぬおれぬの雪まらけ 探丸
こはもりのぬおれぬの雪まらけ 探丸

下あや雪つち上の夜つぬ 凡兆
下京の志つあき冬の夜の志つあきよは雪つち上の夜のつぬと云
んかたき。○上五君の家きとあり

あつと川一ツ脚や雪の京 全
かくおしおしたあ一化ちんくく初心のいのぬああり

信濃路を過るよ

雪ちりや穂屋の雪の川残し 芭蕉

信の農家ありて土居ねのくさくさありて
ひくさくまを道行ふり偶作ありて
あさるかくりは徳屋の神事より
あさる残る燈が又權集抄に
信のちのほやのまをせり

草庵の苗をこして

後の庵をこして
苗をこして

衰老ハ竹原もあまの
具角

折角尋ねしふまをぬり
たうをかあしめふり

雪の日は木の子つる
羽竹三

東坡の子呈しこのせん
我大和たきしの風流ハ

誰とも健つあふ
長崎 外七

はんは仕徳の人あり
雪の旅りあて

いつかけて行や吹雪の
去来

これかあまの旅のくさくさ
うへて二句まを

青亜追悼

乳のこるまをほ
尚白

かゝ鞋と空也の
芭蕉

寒の内のかを
かゝ鞋と空也ハ

津はき懐
似ぬものが
乙州

吾をゆけりあり
子孫向こ下心ハ
の弟子平貞盛ニ代を
行ハ甄をあら

大州の清貧狀を作して知りせたく

住吉奉納

一月ハ我ら子弟を誦ねたまひ 大州

夜神楽やのやハ嘆美のやとて強ひてあくはれ鼻息あつてのハ返去りて切

郎喜ゆ又のそむへさくすふ
伊賀 須琢

一年の内ハその命を祈りし者ハ今年ハ其ノ命ヲ返さずともあはれんか
らとてせしめりてあつては保後まゐるうおはしん服つねやうふん々の
かへつてあがしんかん

家くやかしくもくまも煤拂全 祐甫
て州の新宅ヨテ

人ま家を買りて我が心
世捨人の境界いもんかたあくおとら
芭蕉

弱法師我州ゆきを帰の札 具角

道心あとの物もらひの身うめあつてはいては歸をもちて行きては
て我を成り守りしゆめい強まをいつて歸とつてめをの江たの町
家ハ雨を食頭ぐは切れていよものを書てお居際のお目取あつて浪をく
とてのれあふ家へこの愛いふものを書ぬとそ

年のおやん曾祖父を憶ハふる花 長和

大市日の夜にいそかしくは曾祖父のしからと内のものはあつたぬい小ま
たしやむをきたりていそかしくはかまひぬといふあつた
うすむもの一ある何のときの篇 去来

年を越す用事いゆるものいふるものいふの何のうにうすむ一産の外
るものいふてあつたものいふるものいふるものいふの何のうに
くはせり年のものいふるものいふるものいふるものいふるものいふるもの
伊賀
全

一年何とあつたかぬまきもこの伊せと熊野こといつい放りてさて人懐
をつくらう。伊勢熊野の年記の同者諸國より年記をとりあつたかぬ

大年やまのあつた。人けらる 羽紅

牛のせつあつたかぬと大年あつたかぬ。大かたの人ハもあつたかぬ
あつたかぬと往るをくらむらあつたかぬ

やうくれて又やまらう年のあつた 具角

やうくれてやまの五喜あつたかぬ。一年を「腰やつて」さつたかぬ
又やまらうかぬ。さつたかぬ。一年を「腰やつて」さつたかぬ
又やまらうかぬ。さつたかぬ。一年を「腰やつて」さつたかぬ

いぬと人けらる年のあつた 路通

路通かき食の境界あり。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ

年のあつた破の後のあつた。杉風

は懐一年をくらうした矩横う何とあつたかぬ。公事よさつたかぬ。さつたかぬ
しもさつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ

猿蓑集卷之二

夏

有明の面おとほやほとほ 其角

有明の風情いもんかたあつたかぬ。時鳥の「声」しりしりさつたかぬ。さつたかぬ
おとほやほとほ。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ

夏かき又見やう行や時鳥 本節

時鳥の時候をいもんかたあつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ
さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ

池を横よ馬のさつたかぬ。芭蕉

東西の横南北の縦也。頼政の事。おとほやほとほ。さつたかぬ。さつたかぬ
さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ

時鳥りあまかたし 誰とあし 尚白

誰と待わたりあつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ
誰とあし。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ。さつたかぬ

ほろけはひのひにあまねの所に梅一凡兆

人の待たぬをさるるうらみもせしこころあふて雪のよと凡て世の年のふ
らまゆをぬをあらし金し金し金し

いろすてりたのしきかひ時鳥 智月

屋のうちりたのしき鳥をさるるをいそせしとねと ねるるれいもいこよひ
とせしよまのしとせかるしあふ

蜀魂 あくや木の馬の角樽 史邦

待知まのしきもさして處とあるをさるる木の馬の角樽のあたりそ
つと留てのまたとあとおもふやうにさかぬとあふ

入相のいさの中や時鳥 羽紅

これと同一格で待り待り規の加ねのいさの中や時鳥とあふ
の中りしきあふぬものしきとあふ

時鳥 けしきかひのあたりなる 丈草

これとあふさるるあふのけしきかひのあたりなる
まぬぬさるるあふさるるあふさるるあふ

心あまや友及や何そまら 去来

あれの時鳥をけしきかひして待り居ねのをいさか友及や何そまら
く聞きあふさるるあふさるるあふ

こしは、我隊と鳴き時鳥 奥州

これとあふさるるあふのけしきかひのあつて花とさるるあふ
とこの道廿奥州新古今集の歌ありし奥州の浪の名姓あり初元録より十六

歌仙といふれその一人あり所謂奥州唐土和國大橋小太夫芳地ありあふ

松衣とくめりりるれハ 鶴の

松鳴や 鶴のまをかれ 時鳥 曾良

家々々あおね鳴き多れの時鳥を鶴のまを借りて志つて鳴つたれ其声をお
れいささるるあふさるるあふさるるあふさるるあふ

法師寒衣の子鳥をりし歌ありし千鳥をさるるを鶴の毛衣よりあ歌を詠たれ
れいささるるあふさるるあふさるるあふさるるあふ

とあふさるるあふさるるあふさるるあふさるるあふさるるあふ
あふさるるあふさるるあふさるるあふさるるあふさるるあふ

くまぶささしひかきく閑古鳥 芭蕉
くまぶささしひかきく閑古鳥のおのれは写さひし加

旅談をよみたるをよみたる

若楓 菜いろは成と一すかり 暁 田水

前かきの通り何とあつていろい風情のあいたりあつらけ若楓の葉色をみる
たふさ一すかりおのれいろいろをえておのれいろいろをたふさよるりあるものあり

四月八日詣慈母墓

花水子うつくしうたが 菜いろは 其角

母の墓所へとうて一四の歳り葉ふれは花ふさふ向もたさるるありついに
き若もの歳りを花あまうつして其傳ふ向もたさるるありついに

菜いろはぬ花を牡丹の波あび 全峯

牡丹の大端下りうきあふあり牡丹の心うふと下心してさるるぬは余
情うふいこころ寄りのこころを金信をよみたるをよみたる

ひさか秋冬の花は上りしひさか陽気のゆへありむつふまに拾別

別僧

ちふさの心の心をさるる 菜囊花 誠人

前の別僧と筆を加へよふおのれおのれ

智者のあふ人あふ人あはるる 花 珠璣

智者のあふ人あふ人あはるるのいあるあはるるのいあるあはるるのいあるあはるる
たハルしり花の美しさをえたるありしやとこあはるるのいあるあはるるのいあるあはるる
改定審理謂之智造心分別謂之惠

翁又供してはてはアあるしよ

似合しきけしの一重やほたる 杜国

何の似合一いといふあはるるのいあるあはるるのいあるあはるるのいあるあはるる
さ花あふりし合おるるのいあるあはるるのいあるあはるるのいあるあはるるのいあるあはるる

あまのついでに白ひのゆいーのり花 嵐蘭

美しき花のついでに白ひのゆいーのり花のついでに嵐蘭のついでに

井のすゑに浅く清く社若 羊残

井のすゑに浅く清く社若のついでに羊残のついでに

起る物よまきぬぬ朝の日の

起くのこころかひかきつとに 仙化

前書の起る物よまきぬぬ朝の日のついでに仙化のついでに

顯去末し嵯峨廿浴栞舎

豆極ふ畑と本都を七名系代 凡兆

住人からうして表まきおのしつも見ゆれおまき七名系代を七名系代のついでに

破垣やわたり茶のよのかしら 曾良

見ゆれ垣あつて破れてり茶のよのかしらを茶のよのかしらを茶のよのかしらを

南都旅店

推のそくあぶの都の産の桐 千那

昔あぶの都の時上々の産桐を推のそくあぶの都の産の桐のついでに

洗濯やまぬもはむ柳の花 薄芝

柳の花のついでに洗濯やまぬもはむ柳の花のついでに

豊國 ちて 豊國明神カ産キヲ指リ 本宮大まをを系

を門のけつし鶴の居るをその婦のつくれりとのあつといふよ
く画ふとの風あり

懐篠の 彦もあつるいし 咲 岩翁

んやうといひし前分の甲たうまの体金信ありらるいし美りまこ

さし さま 客人 やまふまうつ 尚白

端午の節分の事を念ふよりいふまうへししは注ぎれハ士の祝ひある
をわして先祖もをまつらうへしとて又客人やまふまうつやれらる

五月廿日大坂討死の遠志を吊いて

大坂やえぬよの夏の五十年 蝉吟

大坂やのやハ 歎きや見えぬよのとりよて外ふ言をせしめぬことあり
九の文字こそ金信あり

奥州高籠まへ 高籠ハ義経龍居の城あり今ハ早
相らうぬ片屋電井警尾寺か銭

夏のや兵とも夏の跡 芭蕉

此の跡ハ小松を指すあり

兵ハも世忌の若ついものありあつて人うるまうさしと世忌つもの
との故廟夏州のいけりてあかへし一睡の夏のあまのうらみ

這やうかいやの下の 蟬の 声 全

山田の菴あつて菴の下ふ火をく甲しりあふして蚊あを拂ひ着く
ハ猿雄麻あをさきししとてこれハ蟬の声をきしてある也。万葉
集のけしやのうあふし声はるゆかハ我あめやも但し声をきさるの
あしし生をきしてあふ。かいを蚊火又ハ麻火トトリあ説非も

此境さしむるのいへあふこのあや

といはれる夏延と書信氏のいひし

かたつらう角あつむさし 流す 明石 全

前書といひ句といひいせんかたは流す度なるあふ前書よとふま前書よあ
る詞後よりいししこをまてふまもまへの上よ記の心といふ句と各
ててんるへし日日の流るあ

五月わが家ふり物てあめいり 凡兆

凡兆若人ハ此句別まはし入るは只あつていふまたり五月雨の五文字もこ
けりる大丈夫あり。あめいりハ 稜 櫻と書

若もてはほれとよふしおあせたりと月角のうらまぬつたるふまにそつた
とあふん

七十の老醫みまがりくらまゆ子をもとこそりて
あふすくやまいつたこの句をらまその老医いませ

かし時とせらる見志れ各人のあふさるるれハ
衣もおといふひして古来まれある年よこえ

といくとどかくゆあそりりれき
六尺と力成りや五月雨 具角

百姓と妻のうつく葉橋歌 去来

百姓は妻のうつく葉橋つとつたつれてよむとやこころの候のうらまぬ
見し中

志がまや茶山一行ま帰つて 正秀

世のいふまじのソサカ一とかくの如く昔もこの茶を何とあまりの
むいふ作まんる性をふいてあゆみしその如し

つかひまふつあまのふやま 畑 湯力 湯力

坊坊長胸のな行ありし偶仙をも入しおと一ちし峻峽日記よ廿日の冬見
んと羽紅尾来去来途の吟をしかけふあらんあし

孫をかきして
麦茶の家とやらんわ 蛙 智月
お小うこののむいくとおまをふしむさかぬれなるをふ

麦の身を 磯をも 喰ふあし 花紅 江戸
世の中のおぢやのあまをいひいふ中七あひいひ

老川の閑こえて
風流のそよめや 葉の由 梅 芭蕉

雲の如きも風かほる葉ふぬ 凡兆

雲の如きも風かほる葉ふぬ 凡兆

はるやこのおもしろきも来りては雲の如きも風かほる葉ふぬ
さてこのおもしろきも来りては雲の如きも風かほる葉ふぬ
雲の如きも風かほる葉ふぬ 凡兆

三態映く詩のうらみ

雀火やこいそりし鬼尻谷 長崎 田上虎

雀火やこいそりし鬼尻谷 長崎 田上虎
鬼尻谷より地おのれいすたきいし一句のま下止の鬼のうらみ
雀火を鬼尻と見おしして中七は雀火をいしとあやをいしたる

あけりちる糖とちり金ぬかのさ 尚白

草むらや百合の中へ花の白 半残

糖と鷗に同じ水鳥うしてあけりちる糖とちり金ぬかのさ
明友作糖とちり金ぬかのさ

詠より母あき里のかりぬし牡丹あきの中あき百合の如き
百合の如き

病後

空つりやうらみつく百合の花 何処

す花や我もさあも百合の花 七州

子やあんき子の母も虫の喰ん 嵐蘭

此前文、焼蚊の詩を作りてとあり、百合の花をいしとあき
はるやこのおもしろきも来りては雲の如きも風かほる葉ふぬ
さてこのおもしろきも来りては雲の如きも風かほる葉ふぬ
雲の如きも風かほる葉ふぬ 凡兆

浅別

あきまやあきまのうらみ旅の宿 東

奉堂方蓮地のルーキアウマヤシ蓮一板の控あふね々人えまたり

日焼田や晴しくつゝある 蛙 七州
轍の魚の雨こつかしたる人衣合の金まき少民はあもるも表れ候

日の見有き蟹の底の 蟻 一らふ 凡兆

熱者やいりて蟹のそこへかかればなるありぬるや。○字書ニ蟻ハカッラミ
又字曲注ニ蟻ハ蟻ノ形似納乱飛ス因雨而生見湯死又蜂ノハハカハスミニ
歳時記六月之部注并ハ蟻ノ蟻ハカハスミニ
又飛ふ所銘ニ州俗ニテホサホロコトナリ

水を月も白果つとあもに数あるや 全

もと茶の藪のあり候後世のいふつとありて六月のあつたるもせまされ
とありて茶をのこすものみりてはもての葉の湯煮をてありては
見候あり

日の目やこかぬは日者まはし 牛の舌 正房

この周よりよこかぬは日者まはしの牛の舌とモク字規
そありり。○日の目と云ふは津のる一甲候の西のり物なり

志ねんとのちぬあはれそあのかし 野重

大鏡志ねんこの三四尺のホとあり京都上方第ハ三四尺のホハ改し
あ大木候りうあれはあろしこのの木等針と云ふコト

は 日者 竹籜 ぬれに 掬ふの 節 本節

おのぼろいよつたれぬみく羅。すけねははあそくかあちるくすすくのあつた
しやある上立とあつたつたつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

夕白の 夕白 夕白 夕白 夕白 夕白 夕白 夕白

夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へ

夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へ

夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へ

夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へ

夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へ

夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へ

夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へおめあるるに夕白のあまが家へ

子子の着たあも袖に土用千
 たれを言ふあつらひなけり子
 とかゆいやくとのいふあはれ
 のまのまのまの人の衣履り
 つゆいかにあはれりやあは
 らぬ千もあはれりやあはれり
 いらぬあはれりやあはれり
 せしあはれりやあはれり

おもむかひぬのいづれ

源 菖蒲

志すんばあはれりやあはれり

宗次

あはれりやあはれりやあはれり
 あはれりやあはれりやあはれり
 あはれりやあはれりやあはれり
 あはれりやあはれりやあはれり

あはれりやあはれりやあはれり

允兆

唇よ墨つゝ兒のすそみど

千那

御学被りしものしもの夕涼を
 いづれすそみどすそみどすそ
 のののののののののののの

月鉾や児の顔のうら

常良

祇園祭の月鉾をさへしその
 顔のうら顔のうら顔のうら

夕のぬかへをいほ雲の毒

去来

尻山に雲のぬかへをいほ雲
 の毒の毒の毒の毒の毒の毒

はめを浩き入て

雲のぬかへのは敵をぬかす

大坂 之道

前書といはれぬといはぬと
 らいよ余の毒の毒の毒の毒

猿蓑集巻之三

秋

秋凡や蓮をちかひに花了

不知 護人

蓮を乃花了りたるに凡ありん走りて蓮葉をわめん秋凡の字本蓮の葉ありとて根つよくて花をこめりめりて蓮葉をわめん蓮葉をわめりて蓮葉をわめり

かろくこぬもゆき蓮や秋の風

秋風

秋のくぬまこぬめる風の字眼をわしそをたれき此に

也蓮をちかひに何れも秋の風 路道

秋凡にあすういたれきんも蓮をちかひに何れも秋の風路道

まう枯れりあすういたれきんも蓮をちかひに何れも秋の風

人よ似て猿のこゝを組杖の凡

珠碩

秋凡ありん花了りて蓮をちかひに何れも秋の風路道

和賀の全昌寺より菊に

大聖寺の城外ありて和賀あり

秋も成る秋凡や哀の山 雪良

何とせしめきんも秋凡ありん花了りて蓮をちかひに何れも秋の風路道

芦多や踏みの花を秋の凡山川

秋凡ありん花了りて蓮をちかひに何れも秋の風路道

あすや秋や折討全昌の杖の凡 凡此

秋凡ありん花了りて蓮をちかひに何れも秋の風路道

もろも秋や猪のひさの歌あり 去来

猪のひさの歌あり

大比叡やとこふ地葉のや秋志はし 野童

大比叡へとこふ地葉のや秋志はし

わがしるすは... ねんじり

秋葉一雨 文邦

秋の雨に... 五中七も

秋の雨に... 且葉

秋の雨に... 且葉

秋の雨に... 且葉

秋の雨に... 且葉

秋の雨に... 且葉

秋の雨に... 且葉

秋の雨に... 且葉

秋の雨に... 且葉

秋の雨に... 且葉

秋の雨に... 且葉

秋の雨に... 且葉

秋の雨に... 且葉

秋の雨に... 且葉

秋の雨に... 且葉

注

元禄二年...

行脚...

老翁...

ろのちりりて静の法をきく
 いのちのちりりて静の法をきく
 棚屋に加茂の根社あり

月かけわ 梅させる 睦の上 又邦

神の心のほほえみ
 友達の赤い花がまきりた
 梅さし 両手相赤し

虹のし 虹のし 虹のし 虹のし 虹のし

中七姉に
 中七姉に
 おつこに

とせいのちりりて静の法をきく

あはれはあまの月のかきあふる中 史料

五七五
 しの去年の月

あはれのおもむき

あはれのおもむき

向のちりりて静の法をきく

元禄二年の

諸君の上人の古例をまへ

推行宗ハ本時宗と云一遍上人を祖とシ熊野権現の告よりして諸国を推行
 し改定律生六十万人の札を流るる事あり。○本寺ハ相州藤沢山清浄光寺と云
 巡国の名を住職とし本山上人ハ隱居あり。二世上人他阿と云ふ丈多ク代々
 他阿と号し一世上人言此の叡神ハ泥淨をかりかきて社頭ハ砂を爰玉いん
 る事ハ代々の例とれ集註の事ハ川の砂より本履をりきり遊りの砂をひ
 砂をひきりきりして遊りて。○誓願寺の内ハ推行の札十ムアミタツツ
 災是維生六十万ノ人面白くもはふらんものうふ是ハ三熊野記誠應と云
 四句の文を終て此程のその四句の文の上の字をなて禮文のためり書付た
 りた南無あまのたつ尖造はせと秋文と所りそられたの事ハ(十)して其四句
 の文ハ(一)つらある事ハ(二)つらある事ハ(三)つらある事ハ(四)つらある事ハ
 かせ申せらん。六字名号一遍法。十段依正一遍法。万行離念一遍證。人中
 上々妙好花。是ハ一遍上人の孩りたる事と云ふ。

月清―遊りの砂の上 芭蕉

月いあまねくあま土のくくしてふりよふはあまがけり上人のあまへる砂
 のよまをりてふまはこころいせんかたあしきと

仲枝のや狐子を送葉にて。猶子檀弓ニ兄弟の子トあり
 又祖律曰甥ノ子ニ

かのあまの月もえりて川砂も送 去来

惟すい乃にかあしきまがらふ枝の月ハ別して思いとこ

明月や庵寺の葉の本葉 昌房

明月をえさるる月一寺かとい其申すも葉の本葉と云ふはかうかきこと
 いかかしてこそさるる事ハ(一)つらある事ハ(二)つらある事ハ(三)つらある事ハ(四)つらある事ハ

月見れくの結子こそかひ 羽紅

世中ハ傳あぬものやあれり結る月をうらをぬかきを不女子のハ月
 の結いとして結をねむる事と云ふ。

傳正の妹のゆたのまぬたけ 尚白

何某傳正のハ大徳のハ二君妹ハ世誓志つとてありてこれハ遊石の定
 める女ハ身葬の上とていぬはと向の妹ハ法をていぬはと向の妹ハ法をていぬはと向

幼歌や鳴川の波のこゆ舟 凡北

世後のちがきもかまもあしおふ幼歌の中鳴川を流るる表と云ふ事あり

一カヤ衣もやある 駒屋 去来

一カハ南部順盛同書十五甲日とあり牧ハ花牧尾駮荒駮ハ凡都と云ふ
 里の行程あり衣もやある事あり

祥の徳の鳥迄したるふきの電の如 裁人
注を待たぬ多化き成し時と志をなまきぬ

法槽わかぶすし喰りた某畑 正房
某畑のくもきいそんかたふ一物と通むるものありてはまーたる

あやむくてま〜らおやゆる 鑪カシカ式 嵐蘭

キ、ウハ、俗子蜂魚としく醫カッ信濃とてさすりと云鑪は似て計ありしと
きて痛へといし鑪をさるるをこし誤てキ、ウハをあたへたれはさしおをさむ
といふるも一字曲 鑪カシカニカシカ

一鳥不鳴山更幽

物の音じし〜向ある 葉山山 凡北

物の音のまゝのまゝ〜してゐればががし〜といひしは例のたるゝたに
さむ外あり

あつしき物〜見えに甲斐余 増長

唯物静〜と神〜化未のまゝ入へて感あり

旅枕麻のつせなふ朝の下 千里

貧者の様い老あふのドヤとた〜に麻の朝の下つせなふを長〜
あつしき物

鳩鳴や流掃も〜の若き麦畑 砧石

鳩は三枚の羽ありてその若のうらやあれとをん流あや〜やと因て流掃
のそと袖あつしき物してゐるは梅の音も月も現のや〜ま〜をた〜らあり

上へ行〜らめら河や 杖の天 凡北

秋の空の定あふ〜雲の魚の凍のあつしき物の上下の二言のまゝをたせり

鑪カシカつ〜ふ流〜のりし 鑪カシカつ 羊残

殺生を戒めらるるに鑪を酌めると又あふんよりの鑪つらるるをこ

あつしきの音の〜す〜 葉の霜 尚白

田舎間ハ五人ハ寸冬のおまハ一寸六京間ハ六尺三寸皇ハ一寸七ア三公門跡方ハ
六尺寸寸皇ハ一寸八ア是を高懸間〜ハ其方懸〜と用ゆ〜と林草中ハ七尺
皇ハ二寸各横ハ壁の半あり〜の葉ハ隠者のもてあそびものあり〜他〜
〜むに括〜

葉まある跡まこころあかしく 具角

まのつらきこころまのつらきこころまのつらきこころ

あれしむらひのつらきこころまのつらきこころまのつらきこころ

古今集「あはれむらひのつらきこころまのつらきこころまのつらきこころ」

稲うりこころまのつらきこころまのつらきこころ 凡北

自題落柳舎

此ま書柳をうりこころまのつらきこころまのつらきこころ

柳ぬしや柳うちかきぬし 志来

此らあれむらひのつらきこころまのつらきこころまのつらきこころ

赤いほやゆしつらきこころまのつらきこころ 慶生

弘くす竹あしつらきこころまのつらきこころ 凡北

今昔物語のつらきこころまのつらきこころまのつらきこころ

神田奈 大己貴命故ありて平、将門を合をたふふ能き

神田奈 神田明神のあまのつらきこころ

神田奈のあまのつらきこころまのつらきこころまのつらきこころ

花まきまのつらきこころまのつらきこころ 嵐雪

花まきまのつらきこころまのつらきこころまのつらきこころ

行秋の空をうつろふ 牡丹

まわらば秋の夕や 凡兆

行といふはあまの志なりて昔も昔なりたりしと例の酒屋をそしけりともへし
其秋うん月うん月ややくと風癒疹一名痛癩人皮膚瘡虚為風寒所折則記
之和名加佐保呂志

世の中ハ鶴鏡の尾のひも 全

只まらくといふはくはくおのめく心よかへくもるんぬハふむる事よお
らへくしより富とあふ例の鳥よたりとあうさうへけんや

梅の果のまはよとや 秋の首書 荷字

とさかひハとさくさうといふはく先表の字也あり此あり

猿蓑集巻之四

春

梅咲て人の世の海もあう 露沾

梅花悟入の師と年々花同し人同しかるはさうさうのめをさかんものりかき
るるよ

上鴈の山莊まじく 候も奉りて

梅の香や山路隔合 犬のまね 去来

高岳は入る大の如くといふは詞をもつて高岳の梅の香あり梅の香を上
へ往つては人の大の如くをさう下りたり

梅の香や分け入る里の牛の角 句空

碧巖云隔牆見角便知其牛の注りかく梅ありありつて日たきくはてあ
内へ往つては人の牛の角を見て牛をえぬやうふとの梅こそるんぬ吾家の
亭より何とあふぬと

庭奥

梅の香や砂利 土芳

梅の我を危うしちあるらひかきしもく被る砂利をそふ流しけりハ谷の裏の
せすそくさふていんといふ

初枝やゆふさふも 梅の花 羊残

唐ノ讀
テハ細ナシ

〇梅の枝一すぢ 梅の花の初時 梅の花の
やせきこくいまた 梅の花の初時 梅の花の

梅の枝一すぢ 梅の花の初時 梅の花の 蝉声

梅の枝一すぢ 梅の花の初時 梅の花の 酒の初時

梅の枝一すぢ 梅の花の初時 梅の花の 真角

梅の枝一すぢ 梅の花の初時 梅の花の 子良鐘の後

子良鐘の後 梅ありと云

梅の枝一すぢ 梅の花の初時 梅の花の 伊勢神宮の内より良
物忌ト云社家二十八家ありその儀をもちて神事をもて候ふらあり〇子良
として切推のをもとのりすまた主婦のついで志ぬりや腰を候ふらありとて
召使りし斗し神ありかさいぬれに二十三十と月事あり其時をそ
むきぬれに土土と云はるはりぬり候儀を候す

梅の花の初時 梅の花 芭蕉

梅の花の初時 梅の花の初時 梅の花の初時

梅の花の初時 梅の花の初時 梅の花の初時 千那

梅の花の初時 梅の花の初時 梅の花の初時

梅の花の初時 梅の花の初時 梅の花の初時 凡兆

梅の花の初時 梅の花の初時 梅の花の初時

梅の花の初時 梅の花の初時 梅の花の初時 支幽

梅の花の初時 梅の花の初時 梅の花の初時

暗香深動月黄昏

入去の梅はさうとてしきば 風変

もる月をふるして入相のあねの梅まつけらやとやそこの梅をきき

武江もあせしむ旅亭の残後

旅亭もあせしむ旅亭の残後 乙州

意の少く物多きもの白く物多きもの黒く物多きもの白く物多きもの黒く物多きもの白く物多きもの黒く

辛美のとし孫生のほめつたす地のしよ日く

と秋の女はしきさいあつたこい旧友嵐意の身ぬ

方の花や白く物多きもの黒く物多きもの白く物多きもの黒く

るのやよあせいけれもあつたあつたあつたあつたあつた

とわたり涙をおとれあつたあつたあつたあつたあつた

えへえ尻るるるるるるるるるるるるるるるるるる

後すつて又一白く宵の梅 嵐蘭

かとうと云
おろし

上五流窓をたふさつて中七又窓をたふさつて四方の梅々の凡窓の日の
白く物多きもの黒く物多きもの白く物多きもの黒く物多きもの白く物多きもの黒く

百八の加子とまじりや蘭の梅 具角

百八の仏書に云煩悩の右りねい登釈るハつくこさて言を心の周りをけり心の
の周りをまじりて法性直如の梅を見ぬとこ。百八の鐘教諸行無常
是生滅法生滅を已寂滅為樂共四句の文を春夜四句にかけて一交りせ七
つつくとしり即百八煩悩を滅せんためのおもひあつたあつたあつたあつたあつた
を覚えてよめら「後の世をかきて見るこそかたしけれかる日の日は入るや
ありん

いと梅よあせしむ旅亭の残後 去来

正月に独存をいひ止す事をしていひぬれい休露をたふさつてまじりあつたあつたあつたあつたあつた

いと梅よあせしむ旅亭の残後 史邦

おもとけまのあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

祈市や祈市や祈市や祈市や祈市や祈市や祈市や祈市や祈市や祈市や

雪の月 雪はふりぬるまじく 如行

憶翁之客中

裾赤く裳をつまはらん 首斗花 嵐雪

つらき足踏ふかたき 君世あやむ 路通

七種やあはらかり 船がす 具角

我事と戀の日付 根芥子 丈牝

すさびやまつる 咲る芥の花 具角

臍とねのくろさる 月夜が 全

鈍やこぬおまぬを 臍ぬる 去来

首の雪踏痕 垣持成 一桐

首やとや一 山々の志こしかる 溪石

いしすやきぬあつら 氷返 具角

雪の時侯より 正月の氷返 一 市井をあらわす

雪飾りの飾る東の月を見てあはらるる 首斗花のつきかきしむき西の空より多のふりちききりしん 雪のゆるさのこのよかりし雪のしん 山々の志こしかるい

春の中やりのあつた氷の厚くあつらるる 田の水は芥の花のえゆる大なる色 信じてここの薄氷万葉の字類良傳に

空也の道中やまに中五所の三時指をぬりす 木ぬかり 雲はあられに

下五妙し志けりかへとい首の志わしきをくすつげけるものあり

雪の時侯より 正月の氷返 一 市井をあらわす

昔の節言をいふは

昔やう姑の葉をいふゆの玉 元兆

よもぎの葉をいふは

昔や宮園よをする魚日 イカ

二もやうやいふは

やふり雪柳をいふは 操丸

萩木の中の一木の柳をいふは

け、痛にたるのちんま、柳、ハト宅

此の字柳をいふは即真に柳の性質をいふはあやうなゆもさすのち痛つた
ありにたるのちんまをいふはあやうなゆもさすのち痛つた

垣越よとらへてきたる柳が 遠水

たふゆよとらへてきたる柳の性質をいふはあやうなゆもさすのち痛つた
時を過ぎてかくまひのいかりをいふはあやうなゆもさすのち痛つた

よこた川柳手圖あまき、柳が 尚白

此川地をいふはあやうなゆもさすのち痛つた

吉柳の先はぬや、イカ一啖

此柳の先はぬや、水をあかいとらへてきたる柳の性質をいふはあやうなゆもさすのち痛つた

雪けや蛇いりた場のすみ 木白

雪け、雪の混りたるぬや、蛇の季節のあやうなゆもさすのち痛つた

待中の正月もまたやうたり月 揚水

くたり月、十五日のこころをあかす力のおこるはあやうなゆもさすのち痛つた

田家あはれ

麦めしやうらゝ、イカ猫の葉 芭蕉

猫の葉、やうらゝ、麦めし、猫の葉、芭蕉の詩、
あはれ、疑ひ、け、あやうなゆもさすのち痛つた

くらやましおといわけわたしの恋 越人

定家江の歌を奪胎して人こそかひいぬとこ 定家は「くらやまし」の
あつはれの「猫のまほし」はそつあきの夕くらし 様字「妻態ナリ」

こまの友よかまひて猫の室あこのめ 去来

人の「入」はあへてあまの海川柳は色男金方「さうりく」
うてき多入

露沾公ま海寒の當座

巻風よぬまもたため羽織が 龜翁

金まのりくらう句さぬけ「う」のぬれす「」して故う
ぬらうぬらうもさたぬりぬぬ

おの梅のちりゝゝんまは二カが 尚白

金まのりぬれおのりうし 上五の顆のまよこい「」

出たりや楳よあまぬるこたのたけ 龜翁

世代のぬれえへこありぬらう

出たりや幼らろもの物ありれ 嵐雪

たのぬれを「」してそつあつをたうらう

昔まのぬらうぬらうも本のまは 凡北

「」ままを色のあつはまがぬらうらう「」大なるぬらう

白魚や海をま下部のう 具角

此作か「」白魚をもちつたの「」下部の買をたをくりかき
「」字「非」買「」物と物とを易し

人のまらぬれは後や楳海音 尾杉

楳海若「」右は「」人のまらぬれ「」こも「」人「」もの
まらぬれ「」も「」

まらぬれぬらうぬらうは「」元志

中七姉まらうさかぬらうあ

陽まらぬらうぬらうぬらうの上 荷兮

中七姉まらうらまらうらう

かきうらやまをこゝろあぬあかこし 百歳

かきうらやまをこゝろあぬあかこし 土芳

いしゆのいしあそあつる虚木立 氷同

野馬よりあそりた狐が 九兆

うけりふや紫木胡の糸のう唇日雲 芭蕉

いしゆのいしあそあつる虚木立 氷同

物客の塵よりあつるうらむじが 嵐電

彼岸よりあつるうらむじが 路通

このむしあつるうらむじが 野水

藏よりあつるうらむじが 九兆

ますいしあつるうらむじが 決雉

かきうらやまをこゝろあぬあかこし
いしゆのいしあそあつる虚木立
野馬よりあそりた狐が
うけりふや紫木胡の糸のう唇日雲
いしゆのいしあそあつる虚木立
物客の塵よりあつるうらむじが
彼岸よりあつるうらむじが
このむしあつるうらむじが
藏よりあつるうらむじが
ますいしあつるうらむじが

此五胡の糸とい非は空胡の糸のそくあるものうらむじ
いしゆのいしあそあつる虚木立
野馬よりあそりた狐が
うけりふや紫木胡の糸のう唇日雲
いしゆのいしあそあつる虚木立
物客の塵よりあつるうらむじが
彼岸よりあつるうらむじが
このむしあつるうらむじが
藏よりあつるうらむじが
ますいしあつるうらむじが

ゆふのまのいしあつるうらむじが
いしゆのいしあそあつる虚木立
野馬よりあそりた狐が
うけりふや紫木胡の糸のう唇日雲
いしゆのいしあそあつる虚木立
物客の塵よりあつるうらむじが
彼岸よりあつるうらむじが
このむしあつるうらむじが
藏よりあつるうらむじが
ますいしあつるうらむじが

もとのいしあつるうらむじが
いしゆのいしあそあつる虚木立
野馬よりあそりた狐が
うけりふや紫木胡の糸のう唇日雲
いしゆのいしあそあつる虚木立
物客の塵よりあつるうらむじが
彼岸よりあつるうらむじが
このむしあつるうらむじが
藏よりあつるうらむじが
ますいしあつるうらむじが

さきさき今がしじや星か
いしゆのいしあそあつる虚木立
野馬よりあそりた狐が
うけりふや紫木胡の糸のう唇日雲
いしゆのいしあそあつる虚木立
物客の塵よりあつるうらむじが
彼岸よりあつるうらむじが
このむしあつるうらむじが
藏よりあつるうらむじが
ますいしあつるうらむじが

このむしあつるうらむじが
いしゆのいしあそあつる虚木立
野馬よりあそりた狐が
うけりふや紫木胡の糸のう唇日雲
いしゆのいしあそあつる虚木立
物客の塵よりあつるうらむじが
彼岸よりあつるうらむじが
このむしあつるうらむじが
藏よりあつるうらむじが
ますいしあつるうらむじが

春日白壁のいしあつるうらむじが

丁の帰る仕度子まはりくよ紀のつゝのつゝあまあまへしはてし
きひのわたりしつゝあまをいひきよの備はさすかきあふれにわか
かこひしつゝのあまあまの多くのつゝをいひきよをいひきよのつゝ
一かゝるつゝかきあふれつゝあまあまをいひきよをいひきよのつゝ
さるく、秋の例にたつゝのつゝあまあまをいひきよをいひきよのつゝ
まはり、もつゝのつゝあまあまをいひきよをいひきよのつゝ
うあまあまをいひきよをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
このまはり、わたりしつゝのつゝあまあまをいひきよをいひきよのつゝ
のつゝあまあまをいひきよをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ

まはりあやなりのあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
嵐虎

高山よみ侍

まはりあやなりのあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
猿轡

不得たかりまはりあやなりのあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
芭蕉

津田のつゝあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
あまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ

まはりあやなりのあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
史邦

津田のつゝあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
あまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ

まはりあやなりのあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
羽紅

津田のつゝあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
あまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ

まはりあやなりのあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
史邦

津田のつゝあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
あまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ

まはりあやなりのあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
昌房

津田のつゝあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
あまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ

まはりあやなりのあまあまをいひきよのつゝあまあまをいひきよのつゝ
去来

前まよ發句としてしるべしすすましきんきん

うすみこころをくまふる浦のかしら

石口 いかけ

まのあまののぼりりりあのみほる

ふや待ん時くゆき雀のこころあかり

杉風

人情を思せり側徳のこころ

いささか中への抱もや雉子の姿 いさ 芭蕉

まの飛の白景いつかみりそを

芭蕉庵のふるまひを訪

量洲の船めいびいあやせぬ いさ 曲水

オノミノ 雲をのりて懐古の懐かしくありけり 刻をかさう文をまきとのに
ふりて弟の量洲の道にのりてまきとる 式之人の心を失しし地を何む一
あふれこのふよこまをまきとる

本丸廿助旅しるえにくぬ いさ 山店

人情を思せり旅のあふぬまきとる 旅しるえにくぬ いさ 山店

せんがし本丸廿助旅しるえにくぬ いさ 山店

書讀

山吹や宇治の焙炉の白ふ時 いさ 芭蕉

宇治茶の山吹もまのりておいろの白ふとて山吹の山吹もまのりて
まのりておいろの白ふとて山吹の山吹もまのりて

白玉の雲よきりつく椿 いさ 車太

白玉の雲を上下は表て雲よきりつく

わのめいよそくやまいりあうりぬハ髪

けつぶんも物もつしよまきとるをかして

筭しくしもまきとる いさ 羽紅

椿ハなるもののおこころなるまきとる いさ 羽紅

蝸牛おのあせなる椿 いさ 坂上氏

とて見立に新ををらししゆゆ申候後よりのあかしに

昔の昔のわかしとち 椿のまふ 芭蕉

昔の昔のよきまのし 歌の梅をちりしを梅の影にしをを己がしむいしこ

初十くらまたほししと嘆ハこせ 利雪

け梅ハ又出くまほしと嘆ハこせとて梅ハし 是等の花をちりしとて

東叡山 玉のそふ

小坊もや松をかくめて 山寺くら 其角

先夫叡山つゆれしとくらの中子太木の松を生まつて奥の松を

一枝のおほいぬらし 山嶽 尚白

我ら夫をい花ぬれ人とたてた、一枝のおほいぬらしとて折らし

鶺鴒のまはるはまこゆら 山寺くら 凡北

鶺鴒のまはるはまこゆらとて折らしとて折らしとて折らしとて折らし

志先をえし 枝あぶんちる様 大草

志先をえしとて折らしとて折らしとて折らしとて折らし

有明のまらしとて折らしとて折らしとて折らしとて折らし

初十くらののいなるものかハ方角のまらしとて折らしとて折らし

常齋よつとて折らしとて折らしとて折らしとて折らし

常齋よつとて折らしとて折らしとて折らしとて折らし

舊城のふもとをるる

狂見たし 花は月行く神の顔 芭蕉

中七の葛城山の景物この神言一書一神神美月アシケルいかくれも
のりてたしとふ俳りいのをうすし

伊賀の園花垣の北そのめくき吉良の八

重縁の料を所きいんるをうけいんてんらん

一條市の后宮上東門院志良の八重縁を権庭まつせんて献るへ
まじり神ありしころい僧侶(但奥福寺)大に憤りていふた門院
るいし思召しころい伊賀の園全野を庄を分けて花垣の社と
別の寄附せらば毎年花の垣めぐらし宿世をうけて守ら
し他へうきまひりし切かることあり

一里りしお花守のる孫りや 全

たひいひしころいあざとこの一里りし花の守人のる孫りあんそ
てあふよまかひのめいあひらりあを代くまつて居るもの
いはしころいはしころいはしころいはしころ

亡父の墓東夷谷中子有よと歳よて

別れ廿年の後りの地より下りぬ首を前のよ

櫻植を侍りよしかあし母の物清まつて

てその極をまつね他なるよ他の首をねさころ

嘆ふたれけれんハ

まかひしち花吸ふ蝶のけ還り 園風

我も花吸ふ蝶のけくまういあうし

知るくまあはしと花を 去来

ち居物あまふあつていけいしういしうて静をたひ

ある屋の嫌いし花の都が 凡北

花の都人の喜ぶるあふもふふいあきまけいも我世おはんとあふ
まふいしちの銭のしきふしあけいあり屋のまふしちのそり
なるけいしちあふしきふしあけいあり屋のまふしちのそり

浪人のやうして 花 報

浪々のいもを 軒をもちやんをかきうかむ なるよりこそぬをきして 山もも
あり 木懐くあつらふものあり ありあつらふものあり ありあつらふものあり
たつたつた 花の香をきくや あらう 元来かたきつた けしきよきよきよきよ
たつたつた 花の香をきくや あらう 元来かたきつた けしきよきよきよきよ
花をきくや あらう 元来かたきつた けしきよきよきよきよ

暗き花の家牛のゆりへは 長眉

俗家の花見が いろいろ 酒食の肴も 戌睡の 一きとくも なるあり

花も奥ちやす 源のゆりへて

見よばせに 梅もかき いろいろ なるあり

大峰 やす 奥の花の果 曾良

花の果のいも いろいろ 大峰山 なるあり 奥の果の書 なるあり

道灌 山よのゆり

花の池や 花の代を 山風よ 嵐菊

花見ち花よ 花の池の代を なるあり 山風よ なるあり

詩のありと 花の池の代を なるあり 山風よ なるあり

源氏のゆりへて

揮子よ おろろ花の 玄次め 羽紅

揮子よ ちろろ 花の 玄次め なるあり 羽紅 なるあり

庚午の年家を ぼけて

干支のころ 庚午の年 なるあり

ぼけて ちろろ 花の 玄次め 北枝

もし花のき ちろろ 花の 玄次め なるあり

花ちろや伽藍の樞かきし行 凡兆

ちろ花の多き事をつくらしむとて威一行ありて一ノクワ用田のらむ
を常迅速を知れとてこの伽藍に梵語に稽古を翻ス。樞のギリに戸軸に樞戸所
以轉而開也

海棠の花は清なり 次 月 普船

海棠は雨多きと大に花をまきしつらぬる花をとりて海素のほろちろは月あ
きしけくかたりたりは花其用其地而一、常の月と普船の月と少くして
月かたのちろは月と少くして花のちろは月と少くして

大和行脚のちろ

草臥て高からず 花や花の花 芭蕉

草臥て高からず花の白い花の花の花をけふくねのちろは月あ
かたりたりは花のちろは月と少くして花のちろは月と少くして

山鳥や蹴踏よけ行尾のひかり 探丸

山鳥のひかりををせり又たまの鳥のちろは月あ

やまづし海もえよや夕月 智月

海山のつし夕陽のちろは月あ

免角しと花の花の山 山川

免角のちろは月あ

響のちろは月あ 山路式之

響のちろは月あ

本堂塚

義仲、元暦元年正月廿一日、東津若石田為久のちろは月あ

其まきのちろは月あ 乙州

馬のちろは月あ

坊田美がけあしる墨筆のしく秋くぬて

邦

人ましくぬたしんくを執牛してうきあつら終まつけたる

其人 せんごんごうよまきめりやしの墨袋

兆

秋くぬてを執牛してめりやしの墨袋をなしたる

何事しなきまのちか志つかろ

来

あつやすのなまをいっのふる人そをかくて行人とつけたる大峯に入る山伏午の日は空行をいり行あり無言行に午の時行終て下山也

甲のええ筋て午の月ふく

蕉

山家よりなぬめりの志しきよ思をふくこの年の夏に附心は前りの人行をなけて山を降りたぬりのしなまは門の秋に川より又午の月を吹つぬれいつとあやちうのさぬじ

何りきたる去年の夜にたの志たる

兆

志はち志くつらう 別西よりよぬ 垢垢はるをよ古言に 慈鎮のさ可まあり又極年望真地重衛とつして此の方よあぬ 月も志はるけり人まこもつ附心は前りをゆかぬあふもくんとして其淵をのこしとい世をまをたるぬらふといふつけちうへ

芙蓉の花のそびくとちる

邦

やりりいひいふるけ 毎にそのまのらつらつぬはるは 共フヨウに蓮ことをいりいふまにまはるまかきたる 水芙蓉の蓮のこ

吸物に先かまされすのまん

蕉

前方のルしき 庭前まきのあつらぬて客をうをなしたる これらのま化まともぬ知味あへ 肥後国水真寺の水泉池清水苔あき

三守あまりのたかえんら

来

吸物しきいりてのま いたもそのなさうしやれと人のそれらあはるり 舟のこいああ

この春し廬同り男居あつて

邦

はらばらしく 花はらばらしく 春すまぬこのまを何まの 居あつて ことろ七席あつて 花しきいりてのま 廬同にぬらしてけたり 志 廬人よりめつといの男より前りも人の家まあまへ 廬同に唐の詩人 孝賢をましく人

さし木つとちる月と藤吹

兆

前々の田方凡流人の家まあぬいさしなまをまねる

昔もあつらうつ花もあつるよ水鉢

蕉。花

前々の揃うて庭前のルースヤシ

いさろ木してを物の暖たう

来

そのルースヤシをえて暖たうをきくはるに

いちよふに二日の物もか言てあ

北

前々の人かりをえきたるにまふくあこのさよをえたるあう

雪けけうきまてあふの北風

邦

前々のあつらうつをえてはるあつらう

火よふにまあるぬいさる峰の寺

来

舟の目やあつらうつをえてはるあつらう

時鳥 空鳴ははるあつらう

蕉

あつらうつをえてはるあつらう

庭のあつらうつをえてはるあつらう

邦

たよふにまあるぬいさる峰の寺

隣りかして車にこむ北

前々のあつらうつをえてはるあつらう

いさろ木してを物の暖たう

そのルースヤシをえて暖たうをきくはるに

いちよふに二日の物もか言てあ

来

前々の人かりをえきたるにまふくあこのさよをえたるあう

雪けけうきまてあふの北風

北

前々のあつらうつをえてはるあつらう

火よふにまあるぬいさる峰の寺

邦

前々をうかして討北我多岐の牛をうり入さしと太平記頼貞回
忠の巻の口よりをゆやをたの如しとくもわいゆたりものもこの死犯
をせんといふ難なるものなりと云ふ

春の天のあけの月の物ゆき

来の月

前々をいれして大丈夫の空際さつりてうら花の深きなるは

湖水の秋の比良の物まね

蕉

前々のるしきさの物まねをたれり

はなをたやせきまめまもれし歌をむ

邦

前々の物まねの用いなるゆはまのまをたれりあつらひをりかたに
そこはまめまめまもれし歌をむとくは陸奥の境界とぬわし口澄恵信都
坊のともする家のゆはまをたれりは多そ武ね登人のまねりてあつらひを
まてするもの登人の長袴をまきたるはんそまをまをりてそをりるは

ぬのるまの物まねの夕ぐれ

兆

そと柳のあけをたれりてあつらひをりて夕ぐれのまねりてあつらひ

押合のてまねりて又まねりて

蕉

旅真のさまよふてあつらひ

たのりの物まねのあま

来

旅休あつ前々の内外あり踏鞠のりふらそをまねりて一説にまを良の
山の雲のあけに足ある旅旅のゆらりとまねりてあつらひ

一梅鞆つくる家

兆

前の旅力の物まねのたのりのしとあつらひをりてあつらひをりてあつらひ
ゆはまをたれりてあつらひをりてあつらひをりてあつらひをりてあつらひ
さのつけんといひしとあつらひをりてあつらひをりてあつらひをりてあつらひ

枇杷の古名あま本の芽をえ

邦

あけのつたをたれりてあつらひをりてあつらひをりてあつらひ

志来九 芭蕉九 凡兆九 史邦九

市中をぬのるまの物まねの月

凡兆

市中をぬのるまの物まねの月をりてあつらひをりてあつらひをりてあつらひ

お討海に市中の討方

あつし〜と川くの声 芭蕉

二条の町ありも早また橋あて 去来

此の傳多ありは市中の傳に中二の報の目者門くの後と
あれは向ふも自つらをもらん片所あとの傳に兄様と成る人の
すまはし二条の町ありも早また橋あてのかりつたる他

原もちゆ〜とあるの 一坂 北

前々の用を在御の人の傳をりつら〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて
〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて

けし物、銀にえあるや目ゆた 蕉

五の目その傳あり〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて
おぢら〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて

た〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて 蕉

このあつし〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて

さつら〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて 北

前々の用を在御の人の傳をりつら〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて

そ路の昔とら〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて 蕉

何〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて
ゆるれた〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて

道心のあつし〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて 蕉

童氏まのつら〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて
の時あつし〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて

世の七屋のみ〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて 北

前々の用を在御の人の傳をりつら〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて

魚の骨あ〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて 蕉

前々の用を在御の人の傳をりつら〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて
衆老をえて〜とあるの二坂の町ありも早また橋あて

るまじりく十そまのそまのそまに母まうていふたくとまうていし金さそ
あまうてい

待入く小治川の鑑 末

伊原氏のま橋もえまもて前々のた人門守のま橋とあわりのま橋花よあ
まもりし人ともまもてえまのま橋門守のま橋のま橋のま橋のま橋の
つかうたつひのそまのたれいあのま橋のま橋のま橋のま橋のま橋の
ふもあつひのま橋のま橋のま橋のま橋のま橋のま橋のま橋のま橋の
かかちあつひのま橋のま橋のま橋のま橋のま橋のま橋のま橋のま橋の

まかろし屋敷を倒れ女子共 兆

それや姫君の侍人うた入まてあま女まのまのまのまのまのまのまの
湯あつひのまのまのまの子健くま 蕉

苗香の室を破る夜に夕風 末

苗香知名くしノオモまの内侍人倫まともまのまのまのまのまのまの
けまうてい

傳やまむくまのあつひの 兆

前々のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
このまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

猿川のまのまのまの秋の月 蕉

傳まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

二年のまのまのまのまの 末

二年のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまの 兆

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまの 末

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

さて何しよと云ふをよましつらうと云ふあまふらうと云ふ
あつ折てまあるまのまこぬにたそじかんを

つつちのあふぬにたす 北

ふのかけりあるふの早さうらうたつて

戸障子と花かしの書居るぬ 蕉

言んぬの交なるふ人のつちもをんて直つらと云ふをさして
わめてかくいつけたり

てん志やももりいつた色やく 来

ふらの書居るを窓入しつらうのまていつせん天井ふらんとはるの天井あるし
井の字耕の類 景長ふらう漢書せいこ又上陽の類 漢書せいこやう

こせくしとらぬの群をゆるなむかし 北

これ書家の心をあてば書家の体とてさすつてさすまをせん

春をふらじよ 群し 初秋 蕉

サこも清の和又しかまふらうやのまをほらうと云ふあはぬ人の書かふこと
しつらうちつてさすてはるぬ

このまふらうしつらうの群をゆるなむかし 来

あつらうの群をゆるなむかしはあつてさすてはるぬと云ふあはぬ人の書かふこと
しつらうちつてさすてはるぬ

やのまふらうの群をゆるなむかし 北

このまふらうの群をゆるなむかしはあつてさすてはるぬと云ふあはぬ人の書かふこと
しつらうちつてさすてはるぬ

このまふらうの群をゆるなむかし 蕉

世捨人の群をゆるなむかしはあつてさすてはるぬと云ふあはぬ人の書かふこと
しつらうちつてさすてはるぬ

このまふらうの群をゆるなむかし 来

このまふらうの群をゆるなむかしはあつてさすてはるぬと云ふあはぬ人の書かふこと
しつらうちつてさすてはるぬ

十代綴つる品ありしつたる書をして 兆

前の世に人をして好色のとらふをいつたりとてはるはるうかりに
段の行のそとに

清世に... 兆

これより... 兆

あらば... 兆

あらう... 兆

ほろ... 兆

あつた... 兆

あつた... 兆

あつた... 兆

くすみ... 兆

吾人のゆくまはらけるありし

凡兆三 色道三 志末三

灰汁桶の書... 凡兆

灰汁桶... 凡兆

あら... 色道

あら... 色道

新... 野水

はた... 野水

あら... 志末

あら... 志末

千代綴... 蕉

あつをく... 賜ふ土... 平けり... 初子の...
... 西行家集... 天安三年正月...
有曲事預之者不... 御近侍類十人昔者上ノ申必者... 時謂之子日熊也

首の音は ねし 雨降 北

来かして 朧を 修らる 若の 駒 来

揚り用... 若ぬま... 駒のあま...
... 申す... 北

摩耶の音も 根ふ 雲の ぬき 水

あつの人... 二月... 洞窟... 佛母... 耶山...
... 申す... 北

申す... 魚の... 申す... 北

蛙の口 雲海をかき てる 雲 蕉

物あは じり あり あり け け 水

涼せ せ ぬ ぬ ぬ ぬ 来

金 懸 人 人 人 人 蕉

あつ 風 名 十 十 十 十 北

あつ... 風... 申す... 北

夕月夜岡の昔母のは願もる

蕉

狼の啼くを聞かめて夕月夜をたどりかやふせのは願もるは
を舟にのこし心は世まらんむあまのいあまたのくまか
つらもよをかかくての後に旅うあく岡のつらもれあまのい

人もまらぬあかき家のあ

北

前月の下心をえりて人もまらぬとつけはるは赤淡のあはは願あたるの
伴あり。吉井井あり久しくはあまのいあまたのくまか
つらもよをかかくての後に旅うあく岡のつらもれあまのい

こころもまらぬあかき家のあ

水

くすくすあまのいあまたのくまか
つらもよをかかくての後に旅うあく岡のつらもれあまのい

又とたまりは飲をなむら

来

かたの女共あまのいあまたのくまか
つらもよをかかくての後に旅うあく岡のつらもれあまのい

恨より田村をわきしはかきか

北

前月の内より外の心もまらぬあまのい

かたの社まらぬ社か

蕉

同じ見わたりの中よりまらぬあまのいあまたのくまか
つらもよをかかくての後に旅うあく岡のつらもれあまのい

物賣の尻はまらぬあまのい

来

前月のやうの中よりまらぬあまのいあまたのくまか
つらもよをかかくての後に旅うあく岡のつらもれあまのい

雨のやうに女共まらぬあまのい

水

物よりをえりてあまのいあまたのくまか
つらもよをかかくての後に旅うあく岡のつらもれあまのい

春ねつらあまのいあまたのくまか

蕉

前月の春ねをおそりてあまのいあまたのくまか
つらもよをかかくての後に旅うあく岡のつらもれあまのい

あまのいあまたのくまか

北

あまのいあまたのくまか

あまのいあまたのくまか

来

類書に曰く白くを花を多くし右人の書ありこれに今時只言燈のありて花を
もたせたの又奥の曙を花を多しありの事ありしを記ししをみるに
たりのうらやけ先師秘傳の事なり此に秘傳ありしに早曰く
表に花いさなり

すまひ三月曙のそくり 水

九兆丸 芭蕉丸 野水丸 素来丸

梅若菜まりの宿のそりけ 芭蕉

朱注三股切梅若菜の色立ちし東海通須道一口云のいへたる感懐し
くもあつたのたすらの侵遊に梅あり若菜ありまりの事ありしを
しめんとおしやりたるに梅あり若菜と食類と詰前後生の働ありて
しるり梅若菜の艶をうしたること志も雅俗の事金よき金所なり

うさめめしき若の曙 七州

雲雀あつた田土持明あめや 珍碩

服の旅人遊行のルキにしてはは旅人の望つめはしこの見ゆあつた田土
土もちころあめいさや

志をすれ流あを下さるる 素男

朱注三トキ今之稷園子の類古者祭多し用中黍稷今即以糯米次食和
名抄染之度岐祭併この染に祭もちりして民家田を化りしめ土神を祭
しトキありしては抄流あを下さるるに田土もちを流ふことり
よてうらのんてうけたり

片隅の虫達かへて若の月 州

折南祭りの三トキを下されたりんをむしをかいはむとこの評曰あり
志とすい祭神神に虫達に病休とをす表すきりあものこりり
いふ若多し祭神といへともあかりり神神をいひあふさる虫達に病け
やけきもの若を古人さし合くをこりりくちんさと神心ゆりや
ハ祭法の若をあるあかたをすゆりあつたこりりを抄する

二階の若あつた 焦

客のそりしめかりたりむしものを御体と見ての時こりれの月を若りた

年注本集... 山の志け... 雀か... 山

懐... 秋の月 凡兆

こゝれも... 秋の夕... 月とつけたり余りり化あり

いさね... 海つら 州

前々の力を海の日... 九州地へかけて外海より内海の波の海... 外海

鏡の柄... 花の香 去来

海の時... 花の香... 秋の月... 花の香

灰まき... 菜の味 兆

前々の場... 花のあ... 花のあ... 花のあ

春の日は... 経机 正秀

前々の小... 存在... 花のあ... 花のあ

活屋物... 小供のふりり 来

前々の信の供... 汗拭... 汗拭

汗拭... 羊残

前々の供の男... 汗拭

下 土芳

汗拭... 大膽... 大膽

大膽... 残

高... 大膽... 大膽

大膽... 残

前々の人... 大膽... 大膽

小刀の蛤又あま田工もこ

残

ぬれ浅よ少方とつたけに實の一角の他ある職人を教合つたまの蛤又
ある小刀のあま田工もここのかまのりたるなり

柳の火ともは大年の夜 園風

前よりちよあま田工もここのかまのりたるなり
柳の火ともは大年の夜

いもいもあま田工もここのかまのりたるなり

前より大年といふあま田工もここのかまのりたるなり

ちねちねあま田工もここのかまのりたるなり

華北よかきまぬのちねちねあま田工もここのかまのりたるなり

け夏もあま田工もここのかまのりたるなり

けつけりあま田工もここのかまのりたるなり

海油あま田工もここのかまのりたるなり

前より前よりあま田工もここのかまのりたるなり

咳声の隣ちちち縁つちち

月見ちちちを執りて老人あま田工もここのかまのりたるなり

深へちちちあま田工もここのかまのりたるなり

女房のまの事をおもひあま田工もここのかまのりたるなり

形あま田工もここのかまのりたるなり

前よりこくめ人も魚の男も魚の形をかく職人もここのかまのりたるなり

すすあま田工もここのかまのりたるなり

前よりあま田工もここのかまのりたるなり

花もまたここのかまのりたるなり

このゆきまの春のものかきつるの傳つたあま田工もここのかまのりたるなり

一の家より甚忌める事を朱注西部本通陀西部垂跡應神天皇あり光を和け

利益の藩を同一朱注和共あるまふも又貴し日頃を光同共塵

人の訪ふさうを色にいと神々物者川を渡る傍に住す

根を戸の施此等の戸則印住庵之ありよも夫根世好をうこそ居

根を花の身たる聖治て狐狸ふとを得たり幻住庵ありあり

とよふありしの信何うしハ勇士世官通称沼水子の伯外記

父の暇人侍りしを今ハ八年をかりもしよありて正に幻住

老人朱注膳父藩中亦多八郎左の名をのこ残りて予又翁四十七方

市中をたふること十年をかりて五十年やちかきい力を

義忠のみのを失ひ鳩生朱注古歌よみのむのの影を離れてのや失はんぬの影を父よ

あゆし奥羽象深朱注能因志あすがるの月有き日子

面をあゆしがあゆしさすふこあゆしくらしきあゆし

ここのあゆし北海の荒磯よひすを破りて今歳朱注

湖水の波よ酒あふ鳩の浮巢の流ぬとまると朱注

無名抄朱注鳩の浮巢の流ぬとまると朱注

女陰たのもしく杉端茨あいため垣に結流あとして

卯月の初いとかり初よ入し山のやのてあ朱注

花ちりありとくやまづらん朱注さえおといろ朱注

幼住庵のあれたる朱注十すこのよ朱注山の春の名残のきか

ひつし朱注笑ゆし山藤松は熟りて時鳥あはるる程

宿が馬の 朱注ろくろの宿の馬の宿をいふ

便さへ指を本つて 朱注字屋の意

つゝと 朱注自ら真の境

呉楚東南 朱注杜子美の五言律 呉楚東南城 乾坤日夜凉

洞庭 朱注惠宗煙雨歸 洞庭我滿湘 洞庭欲喚篇舟故 去故人道 是舟

山 朱注未申のそと 多の 人家より 隔り 南薰 東南の風

峯 朱注おろし 北風海を浸して 涼 日枝の山比良の高根

幸崎の松 朱注霞こめて 城あり 枵あり 釣あり 舟あり 笠

取 朱注取山より 木推の土 檣の 小田子 早苗とる

と云事 朱注中にも 三上山 山の上の

ハ士峯 朱注ハ士峯の 仲より して 武蔵野の 古き 極を

田上山 朱注田上山の 古く して 武蔵野の 古き 極を

嶽千丈 朱注嶽千丈の 峯 袴腰 といふ 山あり 黒津の 里

細や守 朱注細や守の 細や守の 細や守の 細や守の

松の棚 朱注松の 棚の 松の 棚の 松の 棚の

彼海棠 朱注彼海棠の 海棠の 海棠の 海棠の

鼻 朱注鼻の 鼻の 鼻の 鼻の

主簿 朱注主簿の 主簿の 主簿の 主簿の

主簿 朱注主簿の 主簿の 主簿の 主簿の

主簿 朱注主簿の 主簿の 主簿の 主簿の

菴を結へる道王玉孫徐佐々造朱注徐佐々道陰於某肆中家有海堂教授結其上時与客蒙飲其劑又

王道入参禪四方歸結屋於主簿峰上嘗有主人至其間問道○主簿官名目唐名ナリ江西廬陵郡鳥アリ木客鳥ト云此鳥二五品アリ腋ノ下ニ白毛ヲ帯タルヲ主簿ト云此鳥ノ色形ニハあまに唯睡壁壁の字又ハ睡癖子ヤ山氏ト

成て居た朱注山の高き形みまをあたけしや山を

閉て吹せ一朱注石林詩話青山閉風望黃鳥枝節書眠の王荆公閉風對青山枝書眠北園たまめたる

時ハ谷の清水を汲て自ら炊くといく朱注西上人歌

岩の古法ありてはれぬもまきすまじや但一家集山家集ありてはれぬもまきすまじや定て一炉の使くつが

ろ一節とたむしはん人の珠ま心さく住あ侍て

角くさる為すまも形持佛一間を隔ておのものを

さもへまあつこの志つ一節たるを飛けさる

良山の僧正ハ加茂の甲斐何りし孝子加茂の初官孝子甲斐守敦直とまに

妻安寛永間の能書形り孝子未詳さるるやよそけたい浴よのぬりていまそかりる

いづしをゆるくをさくを飛顔をもたれいそいそやあしと

筆を流て公住菴の三字をひ送るる如てす草

菴の能念と形ぬすへて山居といひ旅海といひける

志の思ふくくもあく本雲の捨是越のまを如

をかり枕の上の柱を忽く節春のまぬくまふく

く心と動しある官守の忘里のをのまも入まりて

の春の稲くひあじ免の豆畑をかゝる我叟志

らぬ農談あるをの朱晦菴詩野人載日既よ山の端をかくれ

ハ夜望静み月を待ちてハ形を伴ひ是かよひの月の下を
静退してふるを伴ひ

燈を照してハ送るハハ此ものあり李頔の詩子魁魘誰能前
馬孫王の画を写めれた詩あり○大和本草ニ歎部

山跡送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

をそ飛をこも送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

山跡送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

てあをいとひ送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

すみの斜をおもふ送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

は官怒余の地を送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

一ふひ送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

佛送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

羅祖室送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

ハ送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

樂天送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

五臟送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

の神送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

を送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

賢思送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

文送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

質送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

の送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

い送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

つ送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

れ送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

幻送今子起ッ莊子口義曰因西影迎之淡蔭者此時是非待彼之喻ナリ

先あるむ推のなまあり、暮来立

身注原氏推のホの巻子薫まよふんひけしたのいし推がむあ
とらよまよふんひけしたのいし推がむあ
のちかまよふんひけしたのいし推がむあ
化ありまよふんひけしたのいし推がむあ

題芭蕉翁國分山幻住庵記之後

何世無隱士以心隱為賢也何處無山川風景因人美也間讀芭蕉翁幻住庵記乃識其賢且知山川得其人而益美矣可謂人与山川共相得愿迺作鄙章一篇歌之曰

琴湖南兮國分嶺 古松鬱兮綠陰清
茅屋竹椽總教閒 內有佳人獨養生
滿口錦繡耀山川 風景依稀入誹城
此地自古富勝覽 今日因君尚益業

元禄庚午仲秋日 震軒具州

凡右日記

是ハ翁の坐右日記之詞人をとめてあの人を家をもつてその修めりさぬ以上
の幻住庵の記の文にまよひて書きたるなりとあり

時馬坊中入るやる林馬の 曲水

今ハ翁の坐右日記之詞人をとめてあの人を家をもつてその修めりさぬ以上
の幻住庵の記の文にまよひて書きたるなりとあり

くつさめの跡志つてまの山 野水

け山の原ハ翁の坐右日記之詞人をとめてあの人を家をもつてその修めりさぬ以上
の幻住庵の記の文にまよひて書きたるなりとあり

鶺鴒のはりし時ハ翁の坐右日記之詞人をとめてあの人を家をもつてその修めりさぬ以上
の幻住庵の記の文にまよひて書きたるなりとあり

一寸翁を何とてやうと云ふまの日の七まのまのひてハ翁の坐右日記之詞人をとめてあの人を家をもつてその修めりさぬ以上
の幻住庵の記の文にまよひて書きたるなりとあり

月もさすりやまゝ

海山より下りて下りて 凡北

幻住庵より四方の眺をいふことありて海山を月をさすりて

新ちの手に若知未をる猿のあり 千那

翁の山居のありし月をさすりて新ちの手に若知未をる猿のあり

細脰のやすき海やまの山 砾碩

殊り子細きやいふことありて殊りをさすりて新ちの手に若知未をる猿のあり

贈帝帳

おとあつて帳帳かたて送るルル 野徑

今夏文の情おとろし下知の海を早まかりてぬ例に

いつたまてて海のものもるおとあつて 里東

おとあつて海のものもるおとあつて里東

谷のありしちのいとおもひのいさるる人 〇ぞものぞいさるるいさるるいさるる

巻中の体もくはくはの註もくはくは 乙州

巻中の体もくはくはの註もくはくは

巻中の体もくはくはの註もくはくは 怒誰

氏文集に律室中有美人常結鬢朝市

巻中の体もくはくはの註もくはくは 探志

峰より注もくはくはの註もくはくは 探志

タトルニ勾會ニ蹴躑ニ字彙ニ緩歩ノ形

五羽六羽巻もまりんかん馬 元志

淋しき巻の体もくはくはの註もくはくは

木つみき子わねて出るぬ難が 泥土

巻中の静もくはくはの註もくはくは 一物の境界をいひかきたる

望まぬつねすくは凡のりあ 史邦

記ニ本旨の松ツミあまをさすりて望まぬつねすくは凡のりあ

つハ柱マカケたるまのふりり〜風ノ俣リ

月待や海を庵月より月 涼し 止秀

海を眺めてす〜この月を待たし〜とまれ〜をま上のまの庵をうらとそ

志つかき、粟木の葉ふまつむ法あるが 押隠

詠の谷の法をを汲んてと〜有粟のまゆむ〜よ〜をき〜るんうへ〜

涼しきやとももよまかむ 推り木 如行

法堂の境界のまき〜と〜るのむ〜を〜を〜か〜らん

訪ふらふらふら 如行 法堂のまを

推のちををぬかく〜推りや 柳のま 朴水

推と推のちをこのまぶ〜推り推のちをを〜を〜す〜と〜ぬ〜と推の木の

月の下やふ法あるま海源 市隠

千里一瞬のま〜と〜る〜の〜ま〜の〜ゆ〜り〜は〜し〜る〜

膳お朱あや早苗のかけうらヌす〜 羊残

山居のぬへ〜ま〜の〜の〜ま〜を〜し〜か〜つ〜か〜り〜す〜ま〜と〜び〜ら〜日〜を〜ま〜つ〜つ〜と〜ぬ〜

麦の糸を土産す

糸注山城の鳥羽田の麦糸を土産す

ふいおま〜り〜た〜山〜し〜ろの〜ま〜も〜あ〜ん〜こ〜を〜の〜ま〜と〜ま〜ぬ〜津の〜園を〜か〜つ〜ら〜

一や衣のぬや鳥羽田のこ〜し〜麦 大坂 之道

鳥羽田の麦を〜し〜よ〜ま〜た〜ぬ〜古〜今〜集〜の〜歌〜の〜ま〜も〜あ〜い〜ん〜こ〜を〜ま〜ぬ〜

書音

一夏入る山さりかや旅なすき

長サキ 魚目町

朱注僧家四月を以て法夏とし、安居九十日七月を以て解夏とし、旅
庵すきも九月十日のころ山を移してあそぶらんといふ

夕立や梅の自^サ白の一角あまこり 及肩

山居の体かこころよくもたつらん、朱注躬良香、書へいこうと

昇猿腰杖

秋風や田上山のくねりより 尚白

見たるまの二化してよきあめをこころ

贈 蓑

あらまのままたあまの行へ哉 北枝

あまもあまのままたあまの行へ哉、朱注まのままたあまの行へ哉、書へいこうと

木履めく側りもくもく花 木節

木履の体こころよき、朱注まのままたあまの行へ哉、書へいこうと

包紙と書

箱のこころよきあまの行へ哉 七、八 羽

あまのままたあまの行へ哉、朱注まのままたあまの行へ哉、書へいこうと

稲の花のゆきを佛の土をなす 智月

仏の衣手を利用を、朱注まのままたあまの行へ哉、書へいこうと

石山や行かて早も秋の風 羽紅

幻住庵をいもたつて、朱注まのままたあまの行へ哉、書へいこうと

箱の箱やまぬをいもたつて 昌房

いもたつて、朱注まのままたあまの行へ哉、書へいこうと

甲斐のままたあまの行へ哉 何処

いもたつて、朱注まのままたあまの行へ哉、書へいこうと

箱やいもたつて、朱注まのままたあまの行へ哉、書へいこうと

あまのままたあまの行へ哉、朱注まのままたあまの行へ哉、書へいこうと

と修ふ不くしうふぬのやけりめなき後身をもとんとしう

裁人と同く語合す

蓮の實の借りて入る巻が 等哉

とくふふ入るしや蓮の實のくかひたうかひ

明年涌生身日也

まじりかや何ししも星た力のいつい 嵐蘭

花唐好まるといふは何れじもまてあめりてこの方のいつい流石に人いねい
やうれいもいこいけしむかひもあめりてあめりては蓮の借りて入る巻が
まじりかや何ししも星た力のいつい流石に人いねい
とくふふ入るしや蓮の實のくかひたうかひ

同夏

涼くもや秋夜をすへ任捨く 曾良

十のふふ一物もくこをそくこくははるえ

跋

猿蓑者、芭蕉翁滑稽 兼注史記滑稽傳齊物曰滑稽酒器也言
出口成章詞不窮竭若滑稽之吐酒也又

滑稽ハ妙ノ義替 之首 韻ナラズニハ 六窓一猿の名吟たれハ首韻
ハ詞尺ニナルナリ 韻ト書ハ非ニ課アリトハ課ハ字彙トハ響同也字

典云唐竟神人暢有諒 也、非比 彼山寺偷衣朝市、頂
在空勒予為客在亥中

冠笑 兼注漢室狙戴鶴冠笑朝 只任心感物写真而已
一市金閣狙偷衣感衆位

矣洛下逸人凡兆去来随翁遊學標館竹

寔躡等凌節斯有歲屬撰此集玩弄無已

自謂絶超狐腋白裘 兼注孟嘗君の持必の狐腋の白裘ハ真ニ千
金ナリて天下無双なり是を幸姫子あへて

秦の囚を逃れし日との名表也王褒曰千金之裘一狐の腋ハ祖孫の猿
兼ハ此名表ハ絶超を名として 或人難して曰天下無双の白裘ハ勝れたりトハ

如何答て曰千足の狐を殺して一人の寒を凌くと翁ハ人乃の両目をも猿子着
せたる様と同日のこも子あへて又其表ハ裏をかか合せたるハ千足の狐の腋

下の年を種合をばらむを千の肺の年をより合せて一義も形もなる其文
感すへいさぬハ偷衣頂冠の笑み比まろりめりさるること万々あり
者也於是四方唯友撞々行テ絶サ往来或千
里寄書々中皆有佳句日ニ蘊月隆各程文
章然有昆仲昆トハ許ニ推然穿ヲカス是高弟ナリ仲ハ素堂沾徳
魚倫等ヲカスこれ等の友人えらりの人此集あるもこころこれあり
集禄者素居竈拙為難通信且有旄倪年注
言細語為喜同志雖無至其域何棄其人
字哉果分四序作六卷四季又四時以上四卷歌故不
遑廣搜他家文林也維時古ノ元禄四稔拾ハ

熱義 辛未仲夏余掛錫於洛陽旅亭偶會
兆未之吟席見需記此夏題書尾大張一綑援
毫不揣拙庶幾一篋高張有補干詞海澳
人云

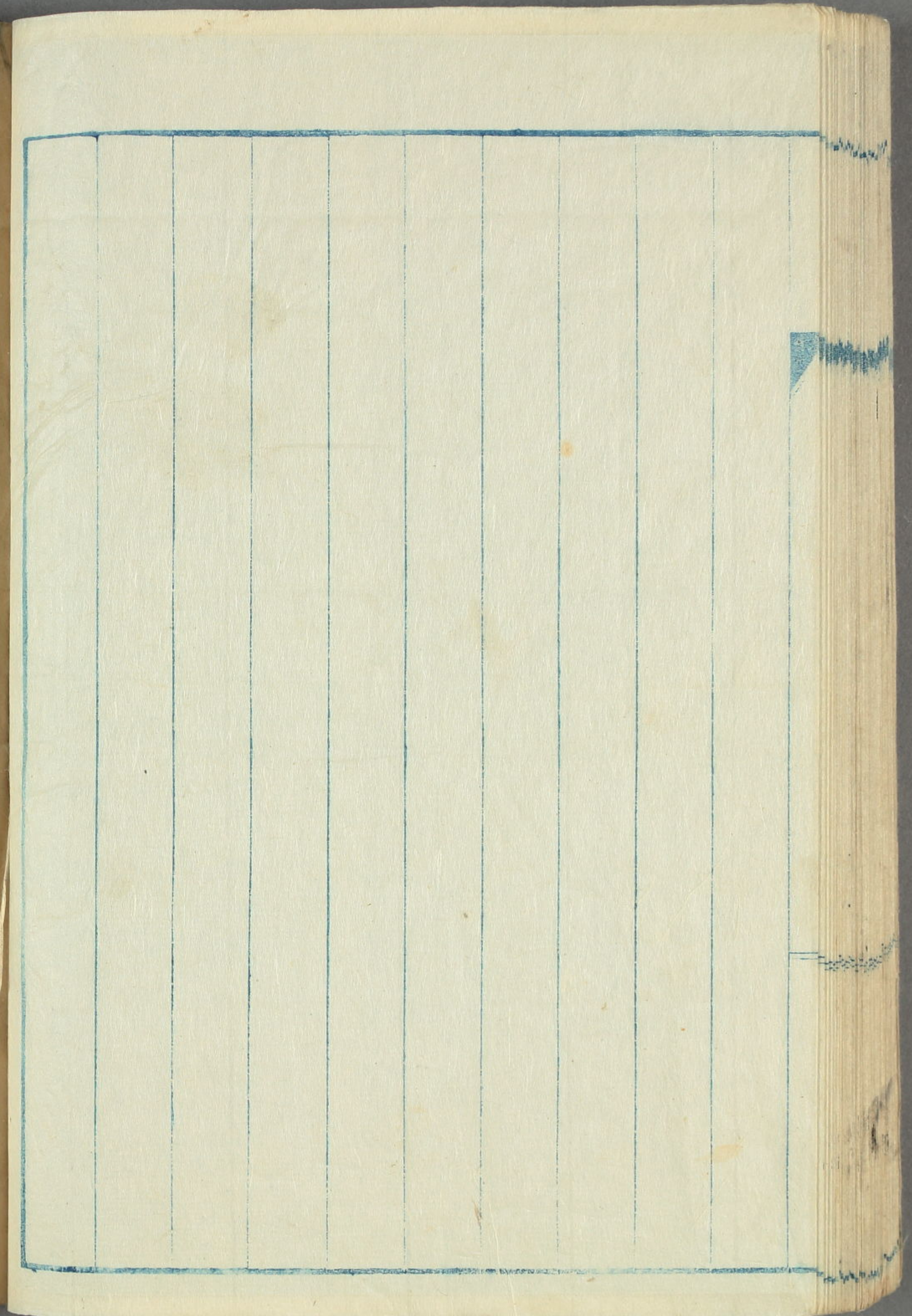
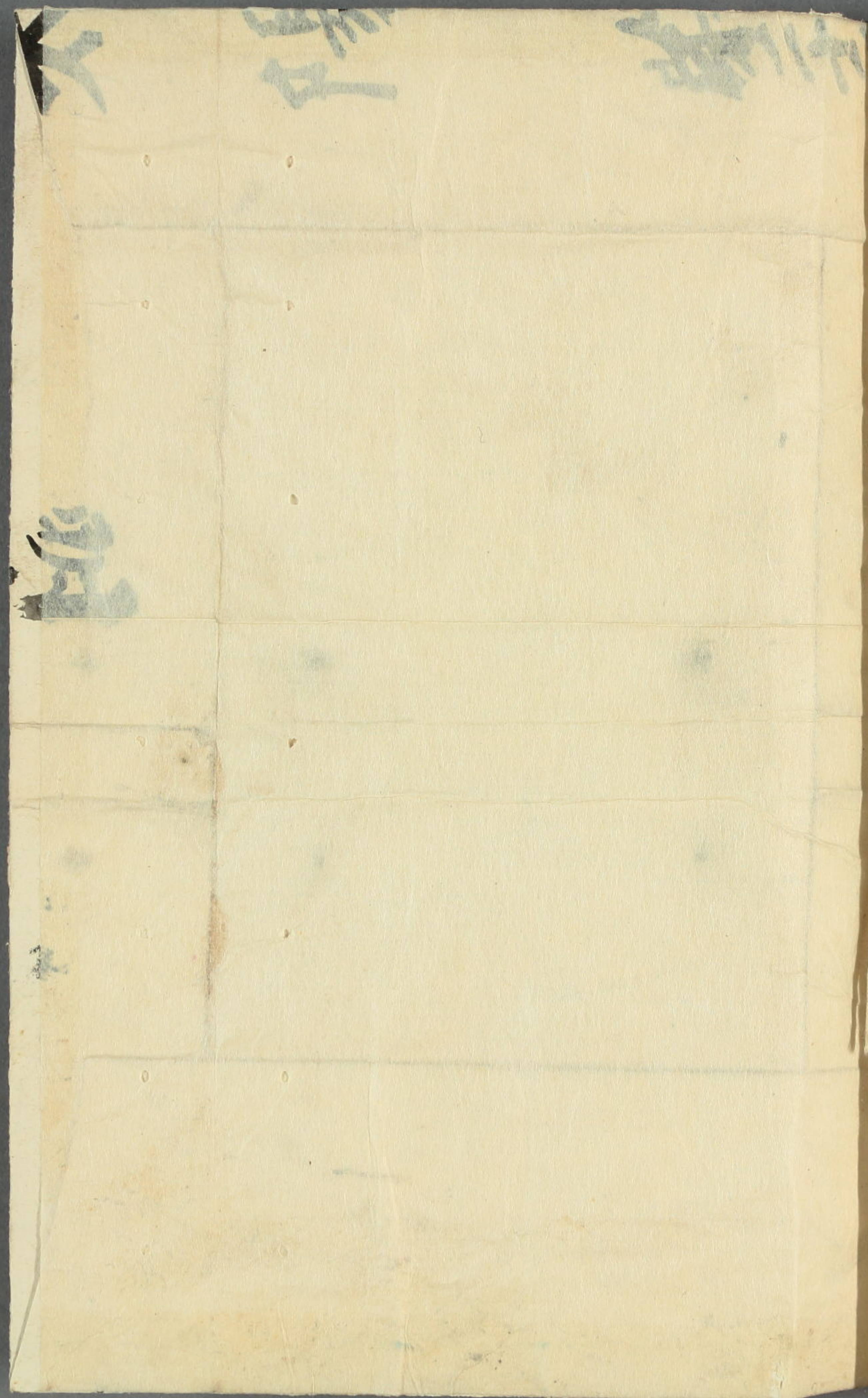
風狂野衲

文章漢書

正竹書之

京寺町二条上 井筒屋庄兵衛

大木アリ



家世世世
世世世
世世世
世世世

剛
後
為
世
回
身